

特定非営利活動法人

VOL.26

南国暮らしの会

2004 年 秋 季 号



平成 16 年 10 月 23 日



NPO 法人 南国暮らしの会

目 次

表 紙		頁
目 次		1
NP0法人「南国暮らしの会」5周年記念情報交換会・懇親会開催のご案内		2-3
バリ島・子連れ身おも旅	No. 617 田澤 満	4-9
バリ島情報モドキ・パート2	No. 593 小林 繁之	10-14
バリ島・ロットゥンドゥー村滞在記	No. 489 加藤 久子	15-19
バリ（ウブド）賛歌	No. 591 神原 克收	20-24
南太平洋サモアへの旅	No. 643 鈴木 憲介	25-28
最近のゴールドコースト	No. 586 磯崎 興志	29-30
パース・シドニー・ゴールドコースト各都市3ヶ月、		
合計9ヶ月間、ホームステイして英語留学ーそのⅡ	No. 417 木内 登希晴	31-35
南米の国ペルー	No. 655 島田 栄一	36-40
南国セブ事情	No. 636 鶴岡 照郎	41-42
東海支部マレーシア体験ツアー	No. 749 山本 義典	43-46
メコン遡行	No. 373 水谷 郷	47-50
警告		51
支部・部会伝言板		52-56
掲示板		57
編集委員より		58

avocado



NPO法人「南国暮らしの会」

5周年記念情報交換会、懇親会開催の御案内

天高く馬肥ゆる秋を迎え皆様如何お過ごしでしょうか。海外ロングステイ適地探訪にも良い季節を迎え色んな計画を練られて希望に胸を膨らませて居られる方も多いかと思えます。

さて当会は平成11年11月にNPO法人の認証を取得して5年目を迎えました。お蔭様で時代のニーズに合致した会の活動が認められ順調に発展をして参りました事、誠にご同慶の至りです。

この節目にあたり5周年記念情報交換会を下記要領により開催致しますので御案内申し上げます。この記念情報交換会は関東支部に限定せず全国の方々への御案内ですのでご自由に参加お申し込みください。お待ち申し上げます。

記

1. 日時：記念式典平成16年11月14日（日）午後13時半開始
情報交換会同日 14時30分～17時
懇親会 同日 17時20分～20時30分頃まで
 2. 場所：東京都南部労政会館（JR大崎駅）案内図参照
東京都品川区大崎1丁目11-1ゲートシティ大崎
ウエストタワー2階 TEL：03-3495-4915
 3. 懇親会：同ビルF1「フェスタガーデン」
 4. 会費：情報交換会：500円、懇親会：3000円
- 尚、ご来賓、情報交換会講師等に付いては会報に添付致しますので、ご覧の上
ご出席の申し込みをして下さい。

会場の関係で今回はご来場の人数を先着90名とさせていただきますので予めお知らせ致します。懇親会は100名と致します。

申し込み方法：FAXのみの申し込みとさせていただきます。

5周年記念行事委員長 市東明義 様宛

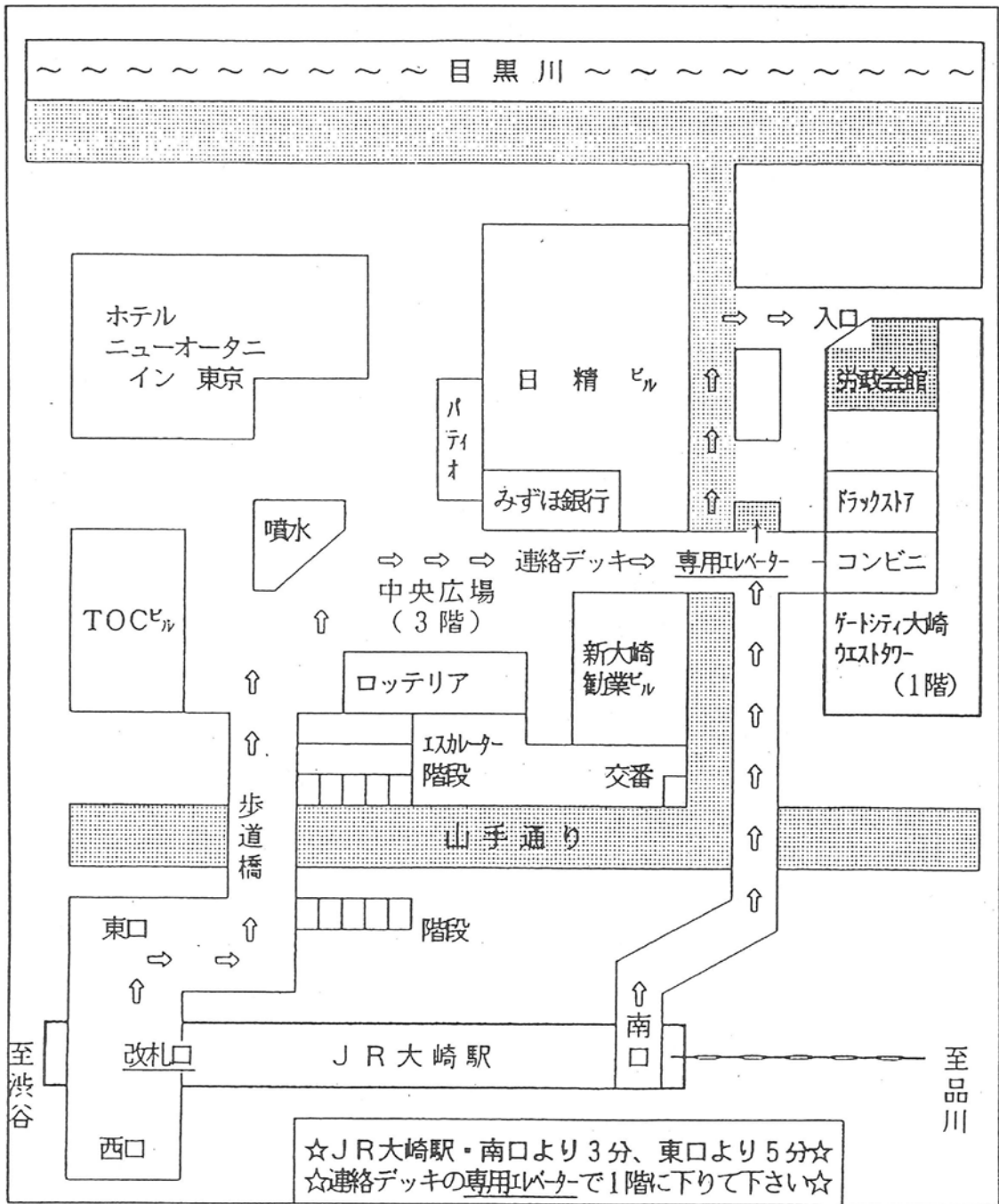
FAX番号：03-3416-2617

以上

南部労政会館・案内図

◇東京都大崎労政事務所・南部労政会館◇

品川区大崎1-11-1 ゲートシティ大崎・ウエストタワー2F
 ☎ 141-0032 ☎ 03-3495-4915 FAX 03-3495-4916



バリ島・子連れ 身おも旅

愛知県在住 会員 No. 617 田澤 満

2002年夏、妻のおなかの中にいる3人目の子も生育が順調のようだし、我が家では「妊娠安定期を利用してどこかへ行こう」ということになった。2人目の子（長女）がもうじき2歳になろうとしていたことも、理由のひとつだった（南国暮らしの会メンバーの方々はあまり関係無いのでご存知無いと思うが、子どもの飛行機チケット代は2歳の誕生日を境にぐっと上がるのだ。従って我が家では、いつも妊娠・出産する度に2年後までの大まかな旅行計画・休日確保を目論んでいる）。また、それだけでなくも前回の家族旅行・中国から1年半が経ち、既に旅の禁断症状が出ていた僕たち夫婦は、早速行き先の選定に取り掛かった。ただ、小さい子どもも2人いるため、行き先はどこでも良いという訳ではない。飛行時間が短い、妊娠安定期+長女の2歳直前に当たる9月~10月に気候が良い、衛生的、安全、時差が少ない（子どもは体内時計が正確なので、現地での移動が少なくすむ…といった条件から割り出し、行き先はバリ島に決定した。

そもそもバリを始めアジア・リゾートは、それまで敬遠していた。旅行だけなら（特に大人だけの旅行なら）僻地の方が断然面白いと思っていた。しかし、我が家には小さい子もいるし、また将来（老後）の南国移住も考えていたため、視察も兼ねてバリへ行くことになった。何を隠そう、僕は将来、南国で「熱帯園芸」をするのが夢なのだ。僕がトロピカル・フルーツを沢山植えて、妻はコーヒー農園の近くで養蜂をやりたいそうだ。コーヒーの花から出来た蜂蜜は、本当にコーヒーの香りがするのをご存知だろうか。コーヒー農園も少しついた果樹園などがあれば、死ぬまで夫婦円満に暮せるだろう。しかし東南アジアなど、外国人は土地を買えないところ、所有の制限があるところが多い。その情報欲しさに「南国暮らしの会」に入ったと言っても過言ではない。

出発前、一応産婦人科のお医者さんに「旅行

へ行ってもいいか？」というお伺いをたてた。おなかの胎児は順調だった。「行くなって言ってもどうせ行くんでしょ…？」と、医者は少しいじけていた。

次に、おじいちゃん おばあちゃんの説得にかかった。近くに住む妻の両親は（註：何を隠そう、僕はほとんどマスオさんなのだ）、『南国暮らしの会』メンバーである年配の方々のように先進的ではない。大体、親がタイとかに別荘でも買って移住してくれれば、僕たちがこんな苦勞をしなくてもいいのだが…。「バリは近いし、観光地だから衛生的」「動き回らずにのんびり過ごす」と良いことばかりを話し、今までの旅行・子連れ旅行の実績をアピールして、なんとかおばあちゃんの承諾を得た。おじいちゃんの方は、いつも事後承諾だ。どうせ認めるはずがないので…（どなたかうちの親を説得してください！！）。

早速荷造りを始める。バリだと夏物で済むので、服は意外と少なくて済んだ。小児科病院でもらった薬、長女の紙オムツ（1日2枚で計算）、折りたたみ式ベビーカー、衛生的に保つためのウェット・ティッシュなどを準備した。

出発の前日、たまたま名古屋の名古屋国際センターというところで『インドネシア・フェスティバル』をやっていたので、情報を仕入れに見に行った。案の定というか、奥さんがインドネシア人で、もうすぐインドネシアのマナドへ移住する知人のK氏にも会った。バリの情報も沢山もらった。バリは名古屋からだ、帰国時の便が夜とても遅く子連れには心配なのだが、そんなときは空港近くにもある日系ホテルで半日分を払って夜までステイとかも出来るそうだ。

僕が主催している名古屋の海外個人旅行愛好者サークルのメンバー（女性）が1人、「ついでにバリに行きたい」ということで、最初の4日間だけ旅に加わることになった。かくして、僕、妻、長男（5歳）、長女（1歳11カ月）、旅サークルのIさん、それに妻のおなかの胎児（妊娠

7ヵ月) を乗せ、名古屋空港発デンパサール行き
のガルーダ機は飛び立ったのだった。

7時間後、バリのグラライ国際空港に到着。
ルピーに両替し、変な日本語の看板を横目に見
つつ、空港からタクシーに乗り込んで1時間半。
やっとウブドに到着した。ちなみにタクシーは、
エアコン付きの車を探した。9月後半のバリの
気候は過ごしやすくとてもいいのだが、窓を開
けていると東南アジアらしい排気ガスが車内
に入って来て子どもに悪いからだ。

ウブドに着いたとき、もう日は暮れていた。
宿はインターネットで予約しておいた、Lumbung
Sari Cottages(1泊US\$35)へ。JL Monkey Forest
(モンキー・フォレスト通り)に面した、便利
な場所にある。ホテルのすぐ近く、ウブドのカ
フェ・ワヤン Cafe Wayan で夕食を取りつつ、
バリ在住の若い日本人に情報をもらった。子ど
もたちは飛行機の中ではよく寝てくれていたが、
やはり疲れていたのだろう。バリ料理を食べる
だけ食べて、すぐに寝た。

翌朝、ウブドの朝市 Pasar Pagi へ行った後、
ホテルや寺院の回りとかにいる、個人のドライ
バーと交渉した。運転手付きの車を半日いくら
という感じで交渉は成立し(金額は忘れたが、
言い値の6割ぐらいまでは値切れる)、まずはウ
ブド郊外の棚田(ライス・テラス)へ向かった。



(上) バリの棚田風景

棚田の近くで食事し、お茶を飲んだ後、今度
はスーパーマーケットへ出掛けた。ウブドのス

ーパーは外観こそ3日で作ったような感じの
建物だったが、店内は大きく、中で売られてい
るものは先進国と比べて特別見劣りしないもの
ばかりだった。フルーツもカットされたものが
パック詰めで売られていたりして、さすが観光
地だ。インドネシアの他の離れ小島だったら、
こうはいかないだろう(大体そういうところ
では、カットされている果物自体が危ない…)。
前述の市場(パサール)と組み合わせれば、生活
必需品はほとんど揃うのではないか。

その後、大人3人、子ども2人でチャーター
していた車を降り、ホテルでゆっくり過ごした。
ホテルはもちろんプールも付いていて、リゾ
ート気分を味わえる。他のホテルでも思ったが、
バリは安価にリゾート気分を味わえるところだ。
例えばホテルのプール・サイドの長イスで寝そ
べって飲むフルーツ生ジュースだが、タイ辺り
で同じレベルのことをやろうと思うと、けっ
こ割高になるのでは?(安い店だと生ジュース
自体が危ないし…)。バリ滞在中、生フルーツを
バリバリ食べ、生ジュースをガンガン飲んで
いたが、全員最後までおなかをこわさなかった。

ウブドには4日間いた。朝は市場へ。昼は郊
外を観光したり買物をして、昼食・夕食はレス
トランで食べ、夜は寺院などで催される伝統舞
踊のショー(『ラーマヤナ』などヒンドゥー教
神話を題材にしたものが多い)を見に行ったり
した。ウブドのレストランは、観光地のせいか
レベルが高かった(バリの他の場所と比べても)。
お洒落なお店が沢山あり、田んぼの前や蓮池の
前など、眺めのいい場所で食べられるカフェな
ども多くあった。バリはここに限らず英語が比
較的通じるが、ウブドには24時間対応の、英語
の通じるクリニックもあった。本当に機能して
いるのかは疑問だが、子連れには少し気休め
になる。各国語対応のインターネット屋さんや欧
米人個人旅行者が集まるカフェなども多いが、
伝統芸能や文化も随所で見られるし、バンコク
のカオサンやサイゴンのファングーラオほど俗
っぽくも無く、とても気に入った。

ちなみに、僕は 妻と I さんの女性 2 人に子守りをお願いしていろいろ行きまろうかと考えていたのだが、女性 2 人の方は逆に 僕に子どもを任せてバリ・エステとかに行くつもりだったらしい。

4 日目、郊外（バリ中南部）のバリ・バードパークや爬虫類パークへ出掛けた。カラフルな野鳥類や、コモド・ドラゴンをはじめとするインドネシアの爬虫類を沢山見ることが出来る。爬虫類パークでは年老いたコモド・ドラゴン（コモド大トカゲ）に触ることも出来、子連れにはお勧めだ。園内でスタッフがうちの子の頭にイグアナを乗せて来て、デジカメで撮り始めた。案の定、出て行くときにうちの子の顔が写し出された T シャツを見せて来た。バリなのに、T シャツ 1 枚 20 ドルだという。親バカ心理を突いて来ているのか、「絶対に値引きはしない」という。「こんなもん買う バカ親がいるのか…」とか思っていたが…。最後にはとうとう買ってしまった。

ここで、一緒に来ていた旅好きサークルの I さんと別れた。彼女は仕事のため一足先に帰国。それまで大人 3 人と子ども 2 人（5 歳と 1 歳 11 カ月）だったが、ここからは大人 2 人・子ども 2 人のマンツーマン体制だ。妻は妊婦だし、荷物も観光中に眠った子どもも、僕が全部持つことになる。長男を妊娠中のとき（この旅行の 6 年前）にも、やはり安定期に合わせてベトナムやカンボジアなどを旅行したが、そのときはまだ子どもがいなかったし楽だった。今回はプラス子どもが 2 人 いるのだ。子どもはおなかの中にいるときよりも、出て来たあとの方がずっと大変だ。やはり、チャイルド・シート付きレンタカーで動き回れるオーストラリアとかにした方が良かったかな…と、一瞬思った。

その夜は、10 カ月に一度のバリの大祭『オダラン』にぶつかっていたため、気合いを入れて見に行くことにした。妻と長女はホテルで休み、僕は 5 歳の息子と 2 人で出掛けた。オダランは

聖なる祭りのため、それなりの礼を取らねば会場である寺院内（ウブドは中心部のサラスワティ寺院）にも入場出来ないことになっている。従って、観光客も男性は「サブツ」、女性は「サルン」というバリの衣装（巻きスカートのようなもの）を腰に巻きつけて入場する。単に布切れを巻いている人も多かったが、うちは気合いを入れて、全身バリの民族衣装で決めて行った。大人用はレンタルで、子ども用（男の子用）はパサールで購入したが（150,000 ルピー）、頭に巻くもの、上半身のシャツ、巻きスカートと 3 つで構成されている。



（上）『オダランの夜』バリの民族衣装です

しかし、『オダラン祭』には気合いを入れて行ったものの、寺院に入って祭りを見学し始めると、息子は 10 分もしないうちにとうとうとしました。バリの伝統音楽でよく使われる『ガムラン』の響きはアルファ派とかで、よく眠りを誘うらしい。やがて息子は深い眠りに入り、僕は熟睡する息子の横で、しばらくオダランの様子を見ていた。

バリは観光地だから、住民もそれを意識して伝統的な風習・生活を続けている（見せている）と少し思っていたが、バリの人たちは決して観光のためではなく、生活に密着した宗教、伝統として、大真面目に祭りに取り組んでいるのを感じた。ウブドでのホテルは小さいところだったが、ホテルのスタッフが毎朝庭の片隅にある祭殿に御供えをしているのを見ても、少しもやらせっぽいところがなく自然だった。あらゆるものに神が宿る といわれているバリでは、市場

でも御供え用の供物セット（花や葉を折り込んだものなど）がいろいろと売られていた。ああいう「無駄？」を何百年来、強制もされないのに続けているあたりが、バリの人気がある理由かも知れない。

1時間半ほどオダラン祭を見ていたが、息子はガムランの響きのせいか完全に熟睡していた。10カ月に一度の伝統芸能祭を見せたかったのだが…。その後、息子を背負ってホテルまで帰った。夜、ホテルの近くでゲッコーが鳴っていた。地元でトッコーとも言われるトカゲの一種で、「ゲッコー（トッコー）」と鳴くことからその名が付いたという。鳴き声を11回続けて聞くとラッキーなことがあるそうだ。

翌日、ウブドを離れる日だ。ウブド寺院前でドライバーたちと交渉して車をチャーターし、まずはメングウィにあるタマンアユン寺院に立ち寄る。水堀に囲まれた寺院で、敷地内にはタマリンドの樹が植えてあった。その後、高原部のチャンディクニンへ向かった。高原地帯へ行ったのには訳がある。ここから近いところにある、バリのコーヒー農園を訪ねること、果物で有名な市場へ行くこと、バリの湖と山を見に行くこと。ウブドから1時間ちょっとだが、この辺り標高も高く、少し涼しい。

ブラタン湖近くのホテルに決めて、早速、近くの市場へ行った。なるほど、いろんな種類のトロピカル・フルーツがある。マンゴスチン、タマリラ、マンゴー、サポー、ランブータン、サラッ(こぶし大のアルマジロのような外観で、中身は固めのパイナップルのような味)、パッション・フルーツ、ジャックフルーツ(ドリアンを一回り小さくしたようなもの)、モンキーバナナ…。日本ではお目にかかれなような果物も山積みされている。タイでもブラジルでもどこでもそうだが、トロピカル・フルーツは本来、一番暑い時期の方が出回る種類は豊富だ。しかしこの季節(9月後半)でも、いろいろな種類が市場に出ていた(さすがに、ブラジル・アマゾンに比べれば種類は少ないが…)。ここに来る

までも、寺院や個人の家の庭などにランブータンやカシュー(カシューナッツ)の樹が生い茂っているのを見た。本当に羨ましい環境だ。

市場でフルーツを買い込み、部屋に戻ってみんなで食べた。普段見ることのない果物なので、子どもたちもかなり興奮していた。

(下) 高原地帯はフルーツも充実しています。



(写真の一番下は、コーヒーの実が付いた枝)

ちなみにフルーツ試食後の種だが…。その後、どういう訳かバッグにまぎれ込んで(汗;)、日本まで来てしまった。子どもたちと一緒に植えたが、もちろん日本では育たない。

ちなみにこのチャンディクニンの辺り、意外にムスリム(イスラム教徒)も多い。モスクもあるし、「ワルン・ムスリム」といわれるイスラム教徒用の食品や雑貨を売る小店も多い。バリといえばバリ・ヒンドゥー一色と思われがちだが、ちゃんとムスリムもいる。

その後、近くのムンドウックにあるコーヒー農園を訪ねた。傾斜地のコーヒーの木々を眺めながら、バリのコーヒー(地元では『コピ・バリ』という)を飲んだ。その後、コーヒー収穫後の焙煎したり豆を挽いたりするスペースを見学。豆はアラビカ種とロブスター種の両方を使っている。様々なコーヒー農具があり、面白かった。樹の高いところに成っている実を収穫するときに使う棒とか、実から取り出したコーヒー豆を天日で乾かすときの熊手のような道具とか、焙煎するときのロースターとか、挽いた粉を均一に揃えるためのふるいとか、興味の無

い人には全然面白く無いと思うが、前述のとおり我が家はコーヒー園に興味があるので、とてもいい体験だった。



(上) ローストした豆を杵で突いている。
(杵を持たせてもらったが、けっこう重かった)

飲んだコーヒーも美味しかったので、いくらか買った。バリ・コーヒーはスーパーなどでもよくお土産で売られているが、安いものの中にはトウモロコシなどを粉にして混ぜ、ごまかしているものもあるらしい。

ちなみに僕はコーヒー好きで、家にはエスニック食材店で買う各国のコーヒーや、旅先で買って来たコーヒー道具（ベトナム式コーヒーのフィルター、トルコ式コーヒーのイブリック、ナポリ式コーヒー器具等々）が揃っている。今は輸送手段が発達しているため、日本でも新しいコーヒー豆や粉が買える。しかしつくづく思うのだが、日本の喫茶店とかで飲むコーヒーは酸っぱい（よほどの専門店は別だが…）。よく、「酸味がある」などと表現されるが、コーヒー産出国のブラジル人に言わせれば、「コーヒーは苦くあるべきで、酸っぱいのは古いだけだ」そうだ。僕もそう思う。明治の頃か、輸送手段が今ほど多くない頃、日本にやって来たコーヒー豆は船での長旅を経て（しかも赤道直下を通過して来たりして）すっかり酸化していたのだろう。「コーヒーとはこういう（酸っぱい）もの」と味を覚え、インプットしてしまった日本人は、酸っぱいコーヒーを好むようになったのかも知れない。僕は普段から日本でも コーヒーを飲む

ときはなるべくスターバックスを探している。

コーヒー農園の木の枝に、まだ真っ赤なコーヒーの実が付いていた。コーヒーの実は、その色かたちから『コーヒー・チェリー』と呼ばれている。実は甘いので、蟻が群がっている。

この辺り高原地帯のため、日中は暑いが 夜はやはり少し肌寒く、家族でくっついて眠った。

翌朝、ブラタン湖のボートに乗り、対岸のウルン・ダヌ・ブラタン寺院へ湖を突っ切って向かった。寺院見学後、今度は 南部ビーチの方を目指した。

途中、またウブドに立ち寄った。特に美味しかった バタン・ワル Batan Waru というレストランで昼食（シダの葉先のサラダ、チキンとパイヤをバナナの葉で包んで蒸した料理 等々）を取りながら、どこに移動して泊まるか 作戦を練った。



上) バリ料理のレストラン Batan Waru にて

「南西部のサヌール Sanur というところが良さそうだ」ということで、早速 サヌールへ向かった。サヌール到着後、スワスティカ・パンガローに宿を決め（一部屋US\$35）、その後ビーチへ出た。どこかのホテル（サントリアーニ・ホテル？）のプライベート・ビーチだったが、宿泊客でなくても普通に遊べる。パラソルとシートも借りて、フルーツ・ジュースを飲みながらのんびりした。子どもたちは、一生懸命 砂浜で貝殻やヤドカリを集めていた。翌日には子どもにせがまれて、グラスボートにも乗ったりした。

サヌールは古くからヨーロッパ人のリゾート

地だったらしく、小さい街なのにドイツの領事館などもある。欧風の家などもある一方で、ビーチでもホテルのプライベート・ビーチ域内から少し外れると、地元のおばちゃんが「サテ」を焼いて売っていたりする。

そのまた翌日、今度は高級？と付くリゾート地のヌサ・ドゥア Nusa Dua へ移動した。ここは観光客のいる観光エリア（ホテルやショッピングセンターが充実）と、地元バリ人の街とが完全に分けられていて、観光エリアはハワイのショッピングセンターのようなところだ。

もう明日は帰国日だし、それまでの旅程で予想よりお金がかからなかったため、奮発してUS \$80のホテル（ラマダ・リゾート）に泊まることにした。よく考えると80ドルと大した金額ではないのだが、かつてインドで150円、エジプトで200円の宿に泊まっていた僕にとっては、海外で80ドル（9,000円近く）のホテルに泊まるなど、エンパイア・ステートから飛び降りるくらいのことなのだ。

「バリはホテルが安いから、いいところに泊まった方が得ですよ」と、いろんな人から聞いていたが、本当にその通りだと思った。他の国で（他の東南アジアと比較しても）同じレベルのホテルに泊まろうとすると、かなり高くなるに違いない。奮発（？）してよかった。ホテルのプール・サイドでくつろぎ、プール・バーでカクテルなんか頼んじゃったりして…。一瞬、子持ちだということを忘れた。

帰国間近なので、ヌサ・ドゥア観光エリア内のショッピングセンターでお土産を探した。僕は家に飾るバリのお面、影絵の人形、子どもの民族衣装やお香なんかを探していたが、妻は籐のランチョン・マットとか、テーブルクロスとか箸なんかを探していた。どうして女は、こうも現実的なのか…。土産屋は大きいのに、子ども（女の子用）の民族衣装はなかなか見つからなかった。売り場のお姉さんに聞くと、「そういうものは街中のデパートで売っている」との回答だったので、早速観光エリアから出て街中へ向かった。街へ出ると、観光エリアとはまた違

った活気があって面白い。デパートでお目当ての民族衣装も手に入った。

（下）女の子用・バリの民族衣装



僕は本来 値切るのが上手なのだが、子どものものを買うときは何故か言い値に近い金額で買わされたりしている。親バカ・オーラが漂っているのだろうか…。この民族衣装も、実はけっこう高かった。妻には半分くらいの値段で申告し、妻と子の買物にも付き合った。

翌日（帰国日）、朝からビーチ、その後ホテルのプールで遊んだ。帰国便は真夜中発なので、チェックアウト後どこで過ごすか…と、子どももいるし心配だったが、ホテルのスタッフに聞くと「空港で待つのは大変だし、ロビーのソファで休めばいい。プールも使っているし、シャワーも空いている部屋で使っている」とのことだった。日本人は夜中便で帰る人が多いらしく、ホテル側も慣れてるようだ。

夜9時過ぎ、車を呼んで空港へ向かった。子どもたちはもう、寝息をたてていた。バリは思っていたより大人も子どもも楽しめ、もう少し長く滞在してみたいと思うほどだった。出来ればまた 今度は赤ちゃんも一緒に、家族5人で再訪したいと思ったのだった。（完）

N0.617 田澤 満、木綿子（ゆうこ）、
出帆（いずほ 長男 旅行当時5歳）、
茉莉咲（まりさ 長女 旅行当時1歳）

連絡先：webmaster@tazawa-jp.com

田澤家のHP：<http://www.tazawa-jp.com>

バリ島情報モドキ・パート2

バリ在住 会員 No. 593 小林繁之

※はじめに

晴天の霹靂が瓢箪から駒か？はたまた口は災いの元と言うべきか？その日は突然やって来た。昨年11月20日、バリ島のマルガの地で行われる州政府主催の独立戦争没後英雄の慰霊祭に、例の如く政府の招聘によって参加した折、私の口から時々インドネシア語の単語が発せられるのを聞きつけた周囲の人の中で、いっそのこと留学して詰め込んだらどうか？との声が出て、私の生来の無責任な性格から、そのときはよろしく！と一旦は別れたが、後日、東京の在日インドネシア大使館で私の留学手続きが進んでいることを知り、大いに慌てて家族と相談を始めこちらの大学や在日大使館から尻を叩かれながら、ようやく準備を整え、慌しくバリ島にやって来た訳である。60歳にして留学生になるとは私自身も正直思いもよらぬことで、大きな戸惑いを感じつつも、週4回の授業を受ける為に楽しく通学しているが、バリ滞在開始後一ヶ月を過ぎ、最近ようやく落ち着きを感じ始めている。

この一ヶ月、トチ狂った風変わりな60男を見物しようと大勢の日本人やバリ人が我が家に訪れてくれ、来客の無い日は一も無いほどであったが、学校でも日常生活でも全く日本語の無い空間に身を置いている為、日本人、特に南国の会の方々の訪問は、私にとって日本語に接する唯一の機会であり大いに感謝している。

以前（昨年の秋季号パート1）にも書いたと思うが、私のバリ島での経験は余りにも特化されており、通常の観光客の参考になるか否かは甚だ心許ないので、その辺をご承知の上でお読み戴きたい。

※バリ島を選んだ理由

惚れてしまえば痘痕も笑窪、千里の道も嫌やせぬ。と言うのが本当の理由であるが、薫り高き南国の会の機関誌用の原稿であるからには、それだけでは済まないだろう十分承知している

ので尤もらしい理由をつけるならば、オラン・バリ（バリ人）が好き、スジャラ・バリ（バリの歴史）が好き、ブダヤ・バリ（バリ文化）が好きなのであると言うと一応は高貴な香りがする理由となる。

事実、バリの人も歴史も文化も日本のそれらと際めて近い関係にあり、そのことは例え単なる観光であっても、少しだけ目を見開いて人々の日常生活について真面目に理解しようと心掛けなければ直ぐに納得出来る筈であるが、残念ながら多くの日本人はそこを知らないし知ろうともしない。只、ヤミクモに値切り倒し、相手の心情は欠片程も考慮せず平然としている日本人が実に多いことに驚嘆せざるを得ない。又こうした類の人々の多くがバリやインドネシア人に対し、大なり小なり潜在的な差別意識を持っていることも事実である。一例を挙げれば、私はこちらに滞在する日本人から、「この男は私の言うことを何でも聞いてくれるから貴方も使ってやって欲しい」と、バリ人やインドネシア人を紹介される機会が多いが、ご本人は親しみの心情を込めての発言だと思っているのだが、何気ないこの言葉に紹介してくれた本人の彼に対する差別意識を感じるのは私だけであろうか？日常生活に置き換えて考えればご理解戴けると思うが、談合や商談は、相手も譲りこちら譲ることで成立するがバリ文化も同じである。「何でも言うことを聞いてくれる」と言う言葉の裏には、相手は自分に対して決して逆らうことが無い従属関係にある人物と見なしている気がしてならない。事実そのインドネシア人に彼との関係を聞くと、以前会った事はあるが顔も覚えていなかったと言う例が圧倒的に多い。

実は、留学先にバリを選んだ理由はそこにある。嘗て文化交流活動を開始する切欠となった男漁りに血道を上げる日本人女性を、例え一人二人漁りにでも減らしていこうと言う約束を州政府幹部と交わしたこともあり、それを実現さ

せるには、私にとっての留学先はバリ島ではなくてはならなかったのである。私の目的達成のために文化交流の拠点として建設した我家の存在や、過去40回のバリ訪問歴のなかで自然に育まれた多くの友人・知人の存在も、当然重要な要素であることは言うまでも無い。

※知人の死

南国の会から依頼されたテーマとは異なるが、バリを訪れる人に是非知っておいて欲しい人物について記す項を割くことをお許し戴きたい。

その人の名はニブヨマン・プレレン、日本名を平良定三と言い沖縄出身で、インドネシア独立戦争に身を投じた多くの日本兵の一人で、私とは10年来の知己である。幸運にも生き延びた彼は、独立戦争で戦死した戦友の霊を守る為、日本国籍を捨てこの地に留まりバリ人として生活をしてきたが、齢80歳、周囲から惜しまれながら6月5日に他界した。

その知らせを受け、10日の葬儀(Ngaben)丁度その時我家に投宿していた日本人数人を誘って参列したが、彼の知名度や功績から見て極めて質素なもので、バリ島では観光資源化している豪華な葬儀を期待した日本人達は大いに失望したようで、申し訳ないことをしたと思っているが、葬儀そのものは、一民間人に対して極めて異例なことにインドネシア国軍によって執行された。

後日、関係者に質素な葬儀の理由を聞くと、本人が生前常に口にしていた様に、バリ人に対し奢り昂ぶらずの精神を実践したもので、国軍の参列は、彼の当時の功績を称えるものであるとのことであった。

私は以前、バリ人やバリ社会のために命がけで尽くした日本人について書いたことがあるが、ニブヨマン・プレレンもその一人で、私が読者諸氏に知って欲しいのは彼の名前ではない。これらの人の過去の功績や道徳によって現代の日本人が、このバリ島で快適に過ごせる環境が生まれているということについて知って欲しいと思っている。私は決して思想的に右翼でもないし、

ましてや戦争賛美者でもないが、現在観光で訪れる日本人には是非とも先人の道徳に恥じない行動をとって貰いたいと常に思っている。

※この地に住んでみて

花を愛で鳥の囀りに耳と傾け、薫風に頬打たれながら、満点の星と月を眺める生活を考えないでもなかった。読者諸氏の中にも、興味深い内容の報告を期待する人も多かろうと思うが、正直なところ私には特にどうと言う感慨は無い。周囲の景色も人々の表情も、私が子供の頃を過ごした大分県の片田舎と大差はないし、社会構造も文化も歴史も、嘗ての日本と殆ど共通しており、中には全く同じこともあり、それ程日本とバリは近い関係にあると言うことを再確認させられる日々を送っている。

到着後直ちに、入国管理局で留学手続きを済ませ、警察や区所への住民登録手続きも完了した。学校の授業は週4回、月、火、木、金の午前中のみであるが、片道30分の道程をダイハツのランドクルーザーを自分で運転して元気に通っているが、空き時間は宿題を数十人の友人、知人への挨拶回りにあて、既に一ヶ月、どうにか落ち着いて来た今日この頃である。

授業は全てインドネシア語で行われ、どうしても解らない部分は英語で説明する方法で進んでいるが、日本人が我家を訪れない限り完全に日本語と隔絶された世界に身を置いた生活をしているため苦しいことも事実であるが、全く見知らぬ人とでも、私がインドネシア語、歴史、文化を学びに来た留学生だと自己紹介をすると、例外なく自分のことのように喜んでくれて胸襟を開いてくれるが実に嬉しい。

※生活情報

□ビザについて

インドネシアでは今年の2月1日付けでビザに関する法改定が行われ、日本人に最も多く利用され従来無料であった60日以内の観光ビザが有料化され、滞在期間30日で一人当たり25ドルとなった。当然到着地での両替は出来るが、

混乱を避けるため日本を出発する前に 25 ドルを確保しておくことをお勧めしたい。この場合、2 人だから 50 ドルでとの考えは通用しない。又 30 ドル払って釣りを貰おうとの考えかたも否である。あくまでも一人 25 ドルということを意識して欲しい。そうすれば到着時入国審査カウンターで長蛇の列に加わらなくても済むスマートでもある。

インドネシアには他にも、ソーシャルビザ、ビジネスビザがあり、前者は別名家族訪問ビザを言われ、インドネシア国籍の保証人がいれば比較的容易に取得出来る為、このビザで長期滞在を果たしている人が多い。また後者は、名前の様に仕事が出来ると勘違いしている人が多いが、企業進出のためのリサーチや商談までが限界とされており、両者ともインドネシア国内で労働し収入を得てはならないことになっている。私の知人に、日本に夫と子供がいる中年女性がいるが、これは完全な違法滞在中で、既に日本領事館も知っており、もし、こちらの入管の知るところになれば、即逮捕、拘禁、強制送還ということになるのだが、知るか知らずかは本人は全く意に介していない。

他にも就労ビザ、スチューデントビザ、リタイアメントビザがあるが、取得は極めて困難と煩わしさを伴うものばかりである。就労ビザは文字通りインドネシア国内で就労または起業することができ、一年毎の更新で五年間の滞在を、スチューデントビザは留学生だけのためだけのもので、一年毎の更新で卒業までの滞在が認められている。リタイアメントビザは 55 歳以上の退職者の長期滞在を認めるもので、これも一年間毎の更新で五年間となっている。私が取得した留学ビザは留学生のみに与えられるものであるため、無論就労は認可されておらず、当然収入を得てはならないことになっている。また留学生は準インドネシア人として扱われる為、留学中に一時帰国する場合、出国申請をしなければならず、出国税も支払わなければいけないが、申請すれば免除されることになっている。

□環境

バリは暑い、というのが通り相場だが決してそうではない。州都デンパサール市内や砂丘は日中だと 30 度に達することもあるが、郊外や山間部は実に涼しくて過ごし易い。私が住む海辺の我家は、朝夕は寒い位でまだ一度もエアコンを使ったことは無いほどである。

またバリ島イコール海。と言う固定観念を持つ人が多いが、これも正しくない。バリ島には海、山、川等の自然は勿論、彫刻、絵画、舞踊。音楽などの芸術、芸能や、その数万とも言われる歴史的寺院もあり、女性好みのエステやショッピングも至る所で楽しめる。つまり一口で言えば、バリは全ての観光要素が僅か 5600 平方キロの面積の中に詰め込まれた場所であり、正に観光資源の宝庫である。

□食べ物

我家で働くスタッフは、ホテルやレストランを長年歩いてきたプロの料理人で、あらゆる種類の料理をこなすことができ、味も旨い。

バリ島はインドネシア随一の観光地で世界中から客が集まるため、食べ物の種類は事欠かない。特にデンパサールの中心地にあるテウク・ウマル通りの両側には地元の人が好むレストランや大衆食堂が立ち並び、夫々に味を競っている。その他にも、観光客やホテルの密集地には外国人観光客用のレストランも多いが、私の実感では外国人観光客用レストランより大衆食堂の方が遥かに旨く値段も安い。バリにお越しの節は是非ともお試し戴きたい。

□交通事情

それがバリ島の味にもなっているのだが、この島の交通事情はお世辞にも良いとはいえない。バリ島での移動手段には徒歩、自転車、ドゥカル(馬車)、バイク、タクシー、ベモ(乗り合いのワンボックスカー)、バス等があるが、一般観光客にはタクシーが、またはホテルや旅行社でチャーターした車の利用をお勧めしたい。東京に比較すると交通法規等無いに等しいこの

地で、地理に疎い観光客がレンタルバイクやレンタカーを乗回すのは暴挙といって過言ではない。他の乗り物を利用するには、地理に自信が持ててインドネシア語が堪能であることが必要だ。

□遊ぶ場所

遊ぶ場所という言葉には色々意味があると思うが、ここでは旅行者風にナイトライフを楽しむ場所と解釈しようと思う。

バリ島では、ホテルやレストラン等のショータイム以外にも、スナック、パブ、カラオケ、ナイトクラブ等が主要観光地にあり、勿論世界中の酒類も楽しむことができる。

但し日本と際立って異なるのは、酩酊した客がいないことである。日本人は飲み始めるとへべレケになるまで飲む人が多いが、世界の観光客は、酒はあくまでも会話の潤滑油と考えており、酒で正体を無くした日本人の姿は周囲の矚蹙を買っている。

インドネシアでは、特にバリ州では売買春、博打、薬物等は厳しいご法度になっている。これらの場所は法の網目を掻い潜った日本のヤクザと中国のマフィアが手を組んで運営している為、極めて危険な遊びだといえる

□両替の知恵

バリ島の街中の両替所では、極めて巧みにインチキが行われることがあるので要注意である。しかしこれは客が十分に用心のすれば避けられることであるが、これが日本国内でおきている場合はどうであろうか。

日本人観光客が外国に行く場合、多くの人が円を米ドルに両替するが、この時、国によって使用不可のドル紙幣が存在することを知らず人は殆どいない筈だ。

ここインドネシアでは、1993年発行の100ドル紙幣は使用不可となっている。しかしこの紙幣は米国内は勿論、日本国内でも通用しているため、日本の銀行もこの紙幣を何の躊躇もなく流通させているが、銀行に絶対的な信用を寄せ

る日本人に、このことに気付く人は恐らく皆無であろう。以後、米ドルとの両替時には必ず2001年以降発行のドル紙幣を要求して欲しい。

これと同時に、コインもこちらでは両替できないしショッピングにも使えない。バリ島では円で支払いを受ける店は多いが、勿論コインは使用できないので注意を要する。

※現状に満足か？

人間の欲望には限りが無い。又それがなければ生きていても楽しくはあるまい。私にも、留学以外にも目的や希望は山のようにある。今回の留学もバリと日本の文化交流の活発化という本来の目的に近づく為の一手段に過ぎないといってもよい。しかし、蟹が自分の甲羅に合わせて穴を掘るように、私もやはり自分の身の丈にあった範囲での目的や活動を考えて行こうと思っている。

バリ島は人々から、夢を叶えさせてくれる場所とも言われている。現に東京では一安サラリーマンだった私に家を持つという夢を実現してくれた。しかしこれは、私自身の努力や土地柄のなせる業ではなく、心から信頼できるインドネシア人の友人の存在があればこそのことである。

特にバリ人は、日本人が差別意識を捨て、対等な目線で胸襟を開けば必ず応えてくれる人達ばかりである。私も先述のニヨマン・ブレレンのように、心の中の奢り昂ぶりを捨て、彼らとの真の交流を深めたいと考えている。

※家族の感想

今回の留学に私は家族を同伴していない。無論、妻をはじめ子供達もバリが好きで、特に長女は、幼児期に私の親友であるインドネシア人の妹の膝に抱かれて育ったこともあって、強い興味を持っているが、その長女も、その下の長男も夫々に仕事を抱えており長期滞在は不可能である。また妻も、留守宅を預かる身としては、短期間ならまだしも一年もの長期滞在ともなれば周囲の状況が許さない。いずれ彼らは

個々が揃ってかは定かではないが、バリ島の我家を訪れることになるだろう。

私の留守中に東京の自宅で様々な不便に耐えながらも、私の留学を全面的に支えてくれているのは妻であり子供達である。私は彼らに深い感謝の気持ちを抱きつつ、今回の留学を成功させようと決意を新たにしているところである。

※おわりに、

私の筆力ではこれが限界か？今回もまた不十分な内容で締めくくらなければならないことを読者諸氏にお詫びをしたい。

しかしバリ島の情報を欲しい人は概ねバリ島を訪れたいと思っている人であろうし、他の人々にとっては幾ら書き尽くしても紙屑でしかない。しかもバリを訪れたいと思っている「南国の会」のメンバーは私より遥かに広く、そして深くこの地を知っていると思うので、私が伝える情報は「釈迦に説法」の枠を出ないものばかりであろう。

只、私はこちらに住む者として多くの日本人に、本当のバリを知って貰い、真摯な気持ちでバリの文化や歴史に触れ、それを更に周囲の方々に広めて貰いたいと切に願っている。同時に、本来のバリ人の生活や、バリ社会の生態系さえも崩しかねないような行動をする日本人が増え一人でも二人でも減少することを願っていることについても、合わせてご理解をお願いする次第である



Palotta Flower
アンズリウム

メーリングリスト

アメリカ入国情報

10月1日より米国入国に際しての情報が入りましたのでお知らせいたします。

米国入国時の指紋スキャン、顔写真撮影(US-VISIT プログラム)の実施状況9月30日(現地時間)より米国に入国する全ての渡航者に対し、指紋スキャン、顔写真撮影(US-VISIT プログラム)の適用が開始されました。これに伴い入国審査に要する時間は若干長くなりましたが、この他は通常通りで、特に混乱はありません。

開始初日の入国審査の状況を、サンフランシスコ国際空港にて体験取材しましたので、お伝えします。

入国審査の流れ

■ 入国審査ブースの前に並び、順番が来てNEXTと呼ばれたらブースに入ります。ブースに入ると、審査官が旅券や入出国カード(I-94WまたはI-94)に基づき、名前滞在目的、宿泊地などを確認します。

■ 次に、審査官がカウンターにあるスキャナーを指差し、指を置くように指示します。スキャンは人差し指を左手、右手の順に行い、スキャンされた指紋はすぐに審査官のパソコンに取り込まれます。

■ 鮮明にスキャンされなかった場合は粘着性の少ない糊のようなもの※に指をのせてから、再度スキャンします。審査官によっては、糊に指を置いてからスキャンするよう指示しています。※この糊はべとつかないので、審査後に手を洗う必要はありません。

■ スキャンが終了と、デジタルカメラで顔写真が撮影されます。スキャン、顔写真の指示は簡単な日本語で行われ、スキャナーのそばにはスキャン方法を示すパネルもあるので、手順に迷うことはありません。また、顔写真の撮影は審査官が示すカメラに顔を向けるだけで終了します。

所要時間

■ 指紋スキャンと顔写真撮影に要する時間は30秒～1分程です。

■ 日本国籍で観光の場合、通常の入国審査の質問と合わせ1人2分程度で審査は終了しますが、審査の順番が回ってくるまで、従来より時間を要しています。

■ 審査がスムーズに進むよう、審査エリアにイミグレーションの係員が待機し、別のブースへの誘導や、I-94WやI-94、税関申告書に記載ミスがないかチェックを行っています。

バリ島・ロットウンドゥー村滞在記

さいたま市在住 会員 No. 489 加藤久子

1.はじめに

6月5日から2週間の滞在中に自分の目で見てきたこと、感じたことを少しでもお伝えできればと思います。(と、お引き受けしたものの期限付きは苦痛?!)

南の島が好きで、何度か小旅行はしていましたが、5年前に初めてバリ島を訪ねた時にバリの気候に癒され、独特の雰囲気に魅せられて、バリ島には何かがある!もっと知りたい!との思いがありました。日頃の激務がストレスとなり体調を崩していたこともあって、自然の体内リズムを取り戻し、異文化の中で自分を見直すのも目的でした。

2.宿泊先選び

到着後3泊はウブド中心部のバンガローを日本で予約しておき、その後の宿泊先は現地を決めることにしていました。宿を決めるに当たっては、会の小林繁之さん、日本人の仙子さん—民族楽器(グンデル)の勉強のためにバリでホームステイしている方—にお世話になり、何箇所か案内して頂きました。

将来長期滞在できそうな所をと思っていましたが、実際に行ってみると、人が少ない所や夜暗そうな所は怖くて、兎にも角にも「一人でも安心して泊まれる所!」が自分の中で第一条件になっていました。

そんな中で、仙子さんがホームステイしている家の地続きに日本人が経営している“バリサンスイ”というコテージがありそこに宿泊することにしました。暗闇が苦手な私は防犯ブザーと鍵をいくつも部屋に置いていましたが、そんな時にウブド滞在中の会の方が「怖かったら、私の部屋に泊まってもいいのよ」と言ってくださったのは、本当に心強かったです。(感謝!)

いよいよウブドの中心部から車で10分ほどのロットウンドゥーという村での生活の始まりです。後になって、ここでは防犯錠もブザーも必要ないんだとつくづく感じた出来事を目の当た

りにすることになります。



3.ロットウンドゥー村の生活

当初予定していたビーチや湖の宿泊旅行はやめて、10日間村の生活に浸ることにしました。

午前中はセマルクニンというウブドの画家が集まって絵を描いたり展示即売をしている村の共同組合に行き、ウブドスタイルの絵を習うことにしました。

絵を見るのは大好きでも描くのは初めての挑戦です。不安な私に画家は笑顔で「まず、描いてみてください。」と言います。でもデッサンの説明もお手本もない!どうしよう、、、とにかく描いて、直してもらって、見て真似をしての繰り返し、どうも五感で覚えていくようです。それにしても、バリの画家達の手先が器用なこと、感性や表現力が豊かではっきりしていることには驚きました。私も日本語、英語、インドネシア語?ちゃんぼんで、必死でこう描きたい!を伝えました。意図しているイメージは解って貰えましたが、技術的には無理と判断されたようです。翌日行くと、私が描くところは塗り絵状態にまで進めてくれていました。(苦笑)

画家にも黙々と描き続ける人、ジョークを楽しみながら描いている人、私に日本のことや日本語を聞いてくる人など、いろいろな人がいます。

セマルクニンには観光客が多勢来ます。日本人、オーストラリア人、中国人などです。ある時、日本人の二人連れが私達の絵を描いている

所をバックに写真を撮っているのですが、私が「一緒に撮りましょうか？」と声をかけると一瞥されて、返事はありませんでした。(瞬間的に感じたのですが、状況が分からず咄嗟に答える言葉が出なかったのかもしれませんが。)

それを見ていた隣の画家が「冷たいね。」と言いました。そこで画家達に「日本人のこと、どう思いますか？」と質問すると、「冷たい日本人もいる。面白い日本人、優しい日本人もいる。バリ人もいろいろいる。日本人もいろいろ。」との答えにもっともと、何かほっとしました。



4. バリ人の家庭生活

朝食はコテージの庭でとり、昼食は主に仙子さんがホームステイしている家の奥さん—アユさん—が庭先で開いているワルン(屋台)で食べました。ナシゴレン(4000Rp、約50円の安さ!)が美味しかったです。パイナップルジュースやすいかジュースは独特の香りがして残すと「口に合わない?」と気にします。そこで、「喉が渇いてないから」と嘘をついてしまいましたが、考え直して「何か果物以外の匂いがして苦手な味」と正直に言いました。するとその匂いの元は、水を沸かす時に入れるバナナの若芽だと教えてくれました。

食材は近くの市場か、そこにはないものはウブドマーケットで買います。

屋台のキッチンプロパンガスですが、家族用のキッチンは昔ながらのカマドです。最初は明るい庭から見ると中が真っ暗なので、物置か何かだと思っていましたが、家族の人達が各自ナシチャンプルーのお皿を持って出て来るので、

よく見るとカマドに薪がくべられ、炎が赤くゆれているので台所と分かりました。

バリでは家族と一緒に食事をする習慣がなく、各々の時間に一人で部屋の前に座って食べます。台所には炉と小さな流しが一つ、木の戸棚の中にその日のおかずと戸棚の上に白ご飯を入れたおひつを盛り、周りにおかずを少しずつ盛り合わせます。

決して清潔とは言えませんが、バリ入りしてから食あたりもクリアしていたので、珍し物好きの私はアユさんに夕食にナシチャンプルーを食べたいとお願いしました。アユさんは涼しげな目元をニコッとさせて「食べてみる?」と喜んで引き受けてくれました。

翌日から食事は昼も夜もナシチャンプルーです。「郷に入れば郷に従え」で私も手で食べてみました。実際、食べてみるとナシチャンプルーは手の方が美味しく感じるから不思議です。これは手で混ぜて食べる料理なのだと思います。おかずはチキンやポークの味付けした物、田うなぎを叩いてスパイスを混ぜて蒸した物、ラワール(豚の血と内臓を混ぜて蒸した物)、鯛の塩漬け、カンクン(小松菜に似た野菜)の炒め物、テンペ(納豆を揚げたような物)など、その日によっていろいろです。

アユさんの家族を知るにつれて、ナシチャンプルーは家族の味がして、日増しに美味しく感じて大好きになりました。

台所の前を通り、お祖母ちゃんに覚えてたのインドネシア語で挨拶すると、とびきりの笑顔を返してくれます。お供えの食べ物を作っている時は必ず分けてくれます。餅米にココナッツやバリ砂糖を混ぜて蒸した物(後でスライスして乾燥させておせんべいみたいにします)のアツアツをバナナの葉にくるんで頂いた時には、何かお祖母ちゃんの人情と敬虔なヒンズー教徒としての人生を感じて胸が熱くなりました。

家族全員が朝早くから本当によく働きます。女性は朝夕のお供物作り、育児、炊事、洗濯、掃除、その合間に手が空けばココナッツの葉でお供え用のお皿を作ったり。男性は各々の仕事。

アユさんの家は農業中心なので、米作や豚の飼育、森に行ってバナナの葉をとったり、大工仕事など。アユさんの夫のスジエンダさんは大手会社に勤務し、家族の生活の向上のためという明確な目的を持ち、張り切って仕事しています。出掛ける時はキリッとした表情で足早になり、誇りを持って仕事をしているのが窺えます。

スジエンダさんは大手会社に就職したので、村では羨ましがられているそうです。家では子育ての傍ら、よく勉強しています。

ヒンズー教は生活そのものという感じです。クバヤを着て家族と一緒にオダラン（村のヒンズー教のお祭り）にも連れて行ってもらいました。お祭りが終わると、アユさんは頭の上に1メートル以上もある供物を乗せて、歩いて家に帰ります。持ち帰った供物は家族で分けていただきます。バナナの若木に串で刺して飾ったトサカ付のスマークチキン、蒸しまんじゅう、スポンジケーキ、りんご、みかん、モンキーバナナ、青パイヤなど。どれも見て想像するよりも美味しかったです。



屋台にいと、家族が出たり入ったり、近所の人と話しに寄ったり、子ども達がお菓子を買いに来たりと賑やかです。

ある晩、オートバイに乗った老人が屋台に衝突して転倒しました。あっという間に人が集まり、原因は居眠り運転、怪我はかすり傷と解ると傷口を消毒し、目覚ましに濃いバリコーヒーを飲ませ、スジエンダさんの弟が老人を後ろに乗せて家まで送って行きました。スジエンダさんの

手配です。あっという間の出来事でした。困っている人を見たらとにかく助ける！という行動が自然と身に沁みついているのが分かり、この一件以来、隣に宿泊していれば防犯グッズは無用と納得し、本当に安心して滞在できるようになりました。



バリの村の人々は家族を思いやり、村人と助け合って生きています。回覧板はなくとも、お寺の鐘の音で知らせます。村人の団結力は強く、お互い助け合いながら、外敵からは身を守ります。根も葉もない噂を言いふらしたり、村人を心底怒らせるような人がいれば、その日のうちに村中が結束して、村から追い出す事もするそうです。ですから情報の伝達には日本以上の注意が必要だと思います。

グンデル（バリの楽器）の先生の親戚の初七日（？）にも誘われてスカワティの村に行ってみました。親戚といっても庭中を埋め尽くすほどの人、50人位は参列されていたでしょうか。仕事をしている人も冠婚葬祭は最優先！休暇を取って参列するそうです。お菓子とバリコーヒーをいただき、お祈り後は闘鶏とナシチャンプルーのバイキングです。

お土産とバティックを買う為、デンパサールの市場に行く車をコテージで手配してもらいましたが、ドライバーがインドネシア語だけしか話せない人と分かると、これ又面倒見の良いスジエンダさんが心配して日本語の話せる弟と、車を手配してくれました。バティックや銀細工は生産地の方が良質の物が買えるということで、

トパティエとトゥルクの村に案内してもらいました。本当に驚くほど親切です。

5. 帰国前に

あっという間に1週間が過ぎ、いつの間にか「チャコさん」(ひさこの“ひ”は発音しにくいようです)と呼ばれるようになりました。徐々に「チャコさん」として受け入れてくれているように感じました。チャコさんのさよならパーティーをしてくれるという話になり、私もお世話になった感謝の気持ちをどう表したらよいものか、お金では失礼かと思いついて会の小林氏にも相談し、その気持ちを伝えた上でお金を包むことにしました。他に私に出来る事は?と考えた結果、ちらし寿司とカレーライスを作って、家族に食べてもらう事にしました。アユさんと話し合っ、翌朝ウブドマーケットと一緒に食材を買いに行くことになりました(なんと朝6時半)。早朝のウブドマーケットは殆どバリ人ばかりで、家庭の食材やお供物を買いに来ています。驚いたことにアユさんが買うと、値切り交渉はなく定価です。アユさんは私に目くばせして「これ、チャコさんが買うと10倍よ」と笑って言います。

パーティーといっても、特別なものは作らず、家族が集まって一緒に食べることのように。酸っぱい寿司飯に顔をしかめながらも、美味しいと言ってくれました。チャコさんの思い出にと、アユさんの義妹が主賓?の私にバリの正装をしてくれました。



スジエンダさんは仕事でいなかったので、お礼を言おうと、アユさんと一緒に帰宅を待ちました。その間、結婚式の写真を見せてもらったり、自分のこと、家族のことなど、満天の星を眺めながら話しました。アユさんが「チャコさん、バリに来る前、病気だったと聞いた。日本に帰ったら又病気にならないかと心配になった。」と涙を流しながら言います。まだ知り合って10日にもならない私のために泣いてくれたのです。あー、何て純粋で素朴で温かい心を持った人なんだろうと感激して、私も思わず涙があふれてきました。そしてお金では買えない尊い心の土産になりました。

一般的なバリ人の日常生活は慎ましく、外出は買出しとヒンズー教の行事と親戚を行き来する位で、決して経済的には豊かとは言えませんが、家族全員の屈託のない笑顔や表情は素晴らしく豊かと感じました。

6. バリに感謝!

春から体調を崩していた私でしたが、バリに来てから、日に日に元気になっていくのが分かりました。村にはありのままの自分でいられる空間がありました。バリ人の思いやりの深さと心情、豊かな自然のお陰です。いつの間にか朝と夜に感謝し、髪は洗いっ放しで、ノーメイク。こんなにも変化し、感動してしまう自分は、良く言えば適応力があるのか?自己不確立だったのか?自分の価値観を改めて考える機会となりました。

バリアートの方は、帰国する日に一応完成(してもらいました)。いろいろ話し合っえて楽しかった事や教えてもらったことへの感謝の気持ちを伝えて、授業料は言われた通りの金額を払おうと思っていました。バリでは現金収入は少ないという視点から極端な値切り交渉はしたくないと思うようになっていましたから。

ところが「あなたの作品だし、お金は要らない。その気持ちが大切。」と言われてしまいました。驚いて、今度は私が困って「それでは、あなたの作品を買わせて欲しい。」と言うと「友達

バリ (ウブド) 賛歌

芦屋市在住 会員 No. 591 少年探偵団 神原克收

☆はじめに

生まれて初めてバリを訪れた。目的は夏のLS先を探すための下見旅行である。私も家内もすっかりバリ (ウブド) が気に入り、私たちにとってLSの最適地は、冬はチェンマイ、夏はバリという結論になった。

1. バリの一日

ウブドの朝は遅い。東の空が白みはじめるのは6時頃からである。陽が射しはじめるのは7時で、夕方は6時半辺りから暗くなり始める。7時にはすっかり暗くなり、その頃からウブド各地で色々な音楽や踊りのショウが始まる。終わるのは9時過ぎで、その客達が引き上げたらウブドの町は急に静かになり、眠りにつく。

朝は決まって6時に、この世のものとも思えぬくらい美しい鳥の声が響き渡る。暫くはこの鳥の独壇場で、他の鳥たちも余りの美声に圧倒されてか鳴くのを遠慮している感じすらする。この美声は決まって10分くらいで終わり、その後は様々な鳥の競演になる。最初はベッドの中で聴き惚れ、暫くしてテラスのソファに身を沈め、少々肌寒いくらいの爽やかな朝の空気を胸いっぱい吸いながら鳥たちの競演を楽しむ。

鳥たちは陽が射す7時前には急におとなしく静かになる。それを機に散歩に出かける。散歩はいつもモンキーフォレスト周辺を、猿たちの歓迎を受けながら40分くらい歩き、ホテルに帰って朝食を摂る。食事は自室のテラスに運んで貰って爽やかな空気の中、おとなしくなったとはいえ、それでも美しい鳥の声を聴き、鳥たちの戯れるのを眺めながら摂る。食事はトーストに卵料理一品、フルーツにコーヒーと至ってシンプルだが実に美味しい。

暫くはテラスで本を読んだり、パソコンをいじったり、ホテルの従業員をひやかしたりして過ごす。10時頃から出掛けて途中で昼食を摂って、2時か3時にはホテルに帰りシャワーを浴びてのんびり過ごす。

夕方6時には、同宿の石川夫妻・伊藤さんと夕食に出掛け、帰着するのは大抵9時ころになる。夕食については、一緒に食事をした人だけ6時に集合し、その時に来なければ個別行動ということで、集まった人だけで出かける取り決めをしている。

ホテル帰着後、暫くホテル従業員と片言の日本語で談笑出来るのがこのホテルの最大の魅力である。従業員以外にもここに数年間、このホテルに住んでいる日本人女性が2人いて、彼女達も話に加わり、堪能なインドネシア語を駆使して、通訳の役目も果たしてくれる。彼等は若く底抜けに明るく、更に従業員や日本人女性の恋人も集まってきて、笑い声が絶えることがない。

10時前には自室に引き上げ、暫く本を読んだりして11時就寝、快適で悩みの欠片もない一日を終える。ああ、極楽！



宿泊したホテルの佇まい

2. 明けの音楽会

ウブドでは目覚まし時計は必要ない。早朝6時頃から決まって音楽会が始まるからである。音楽会の始まる予告編は合唱隊、幕開けはアカペラでメゾソプラノのソロ。明けやらぬ空を切り裂いて響き渡る美声は天国から降り注ぐかのようだ。このソロは10分は続くだろうか。この頃からソロに催促されるようにやおら伴奏が奏で始める。ソロが終わるのを待ちかねて、ソプラノ・アルト・テノール・バリトンなどの歌

い手が夫々に歌い始める。指揮者は不在で皆な勝手に歌っているが、それでも美しいハーモニーは崩れない。7時くらいまで次から次へと歌い手が登場するが、7時を過ぎると歌い手は半分以下に減ってしまう。

声の主をご紹介します。予告編の合唱隊は蛙と鈴虫。主役のソロは百舌くらいの大きさの鳥で、その鳴き声はとても文字で表現できるような半端のものではない、ただただ創り給うた神の匠に感嘆するのみ。伴奏は鳩のクッカー、クッカーと鶏のコケッコ、それに犬の遠吠え。あとの歌い手は、ケキョ、ケキョと鶯のような声の持ち主、雲雀を思わせる囀りを奏でる鳥、グルグルと気持ち良さそうな鳩たち、スズメのようなチツ、チツと可愛い声の集団(スズメもいるが、ツバメくらいの猛スピードで飛ぶ鳥もいる)。更には百舌のような鋭い声の主などなど多士済々である。中には我々の眼前を羽音を残しながら飛び去る鳥、木々に仲良く留って仲睦ましい鳥たち、ふざけ合う鳥たちが耳だけでなく目も楽しませてくれる。

暫くはベッドで聞いているが、すぐベッドを抜け出してテラスのソファに身を沈める。爽やかな朝の冷気の中で聞く音楽会の聴衆は我々2人だけ。目の前には、椰子やマンゴウ・ジャックフルーツなどの木々の緑、大きくはないがライステラスも目の前に広がる。眼下では朝の掃除をする箒の音、遠く近くで朝のお供えをしながら敬虔なお祈りを捧げるヒンズー教徒の人達の姿に、何ともいえない安らぎを覚える。遠くで活動を開始した人々の生活音も聞こえ出した。さあ、食事にしよう。

3. バリ人は祭り大好き

インドネシアは、90%以上がイスラム教の国である。しかしバリは、90%以上がバリヒンドゥ教である。同じヒンドゥ教でもインドのそれとは異なる独特の宗教である。この宗教が、人々の生活にしっかり根をおろし、全ての生活は宗教を中心に廻っていて、宗教が全てに優先する社会である。

朝と午後と夕方の3回はお供えをする。最低でも2回はしなければならないようだ。お供えとは椰子の葉で作った10cm角程度の容器に、花や野菜、時にはお米かご飯、或いはビスケットなどを入れ、お祈りしながら供える。供えるのは各家庭の祠、家の4隅、家の前、バイクの上、大きな木の下などなど至る所に供える。これは昔の日本がそうであったように、どこにでも、神様が存在していると信じられているからである。毎回大体10ヶ所前後お供えする。従って女性は暇さえあれば、お供えの容器造りをしている。これにかかる労力たるや半端ではない。



お供えをするホテル従業員

生まれてから死ぬまで、節目節目にも、必ずヒンドゥ教に則った儀式を受けなければならない。生後3日目、7日、1ヶ月、3ヶ月、1年、3年そして成人式にあたるポトンギキ(歯を削る儀式)、結婚式、葬式など個人的な行事、村のお寺のお祭り、自宅のお寺のお祭り等々、年から年中祭りがついて廻る。この祭りは全てに優先するから、仕事はしょっちゅう休む。これに対して雇い主が苦情を言えば、言われた方は辞めるであろうし、雇い主は世間の響きを買うという。

今回滞在中幸いにも結婚式、葬式、お寺のお祭り(オダラン)、トゥガナン村の奇祭(ウサバ・サンバ)を見る機会に恵まれた。

結婚式は、日本のように決められた時間通りに進むのではなく、実におおらかな時間で進められる。また日本のような厳粛さはないが、逆に堅苦しさはなく、我々旅行者でも参加させて

くれる大らかさ。

葬式に対する考え方は、日本とは大きく異なる。バリヒンドゥでは輪廻転生を信じていて、死は、生の終焉ではなく天国へ旅立ち、そこから次の生へ転生する出発点である。従って悲しい出来事ではなく、目出度い祝い事で、出来るだけ派手で立派な葬式が喜ばれる。従って観光客の見物も歓迎される。



葬式はお祭りそのもの

オダランやトゥガナン村の奇祭に付いては省略するが、これらのお祭りの情報は、石川さんやホテル従業員から頂いた。

4. 音楽と芸術の町ウブド

ウブドは芸術の町でもある。町にはおびただしい数の画家が住みついていて、画廊の数も半端ではない。町のあちこちで、画家が絵を描いているのを見ることが出来る。ウブドには、ネカ美術館、アルマ美術館など、4つの美術館がある。いずれも特徴ある作品を収蔵していて見応えがある。

町の随所に石の彫刻、木の彫刻や置物が実にさり気なく置かれている。お店の窓には思わず立ち止まって写真を撮りたくなるような、気のきいた小品が飾られていて、散歩するときもカメラが手放せない。

夜になるとレゴンダンス、バロンダンス、ケチャなどの伝統舞踊にガムラン、ジェゴクなどの音楽、更には影絵芝居等々がウブドで演じられている。これらのショーは毎日10ヶ所くらいで演じられていて、長期滞在者でも退屈するこ

とはない。

一日中、町のあちこちからガムランの練習をしている音が聞え、特に朝夕は盛んになる。激しいリズムのこの音楽には楽譜はないという。全ては体で覚えこむらしい。子供のときからこの音楽で鍛えられていて、日本人が彼らのリズム感を超えることは、絶対に無理な相談のように思える。

土産物屋の店の奥では、子供が踊りの練習をしている姿が散見される。多分学校の成績よりも、踊りの能力の方が重視されるのではないかと、勝手に想像している。滞在中に王宮で、子供舞踊コンテストなる行事が2日間に亘って行われ、そのレベルの高さは目を見張るものがあった。

音楽も踊りも、バリ人が最も大切にする宗教と深く結びついている。それだけに、練習も真剣にならざるを得ないのであろう。音楽と踊りは、日本人がいくら頑張っても、永久に追付けない分野ではないかと素人判断をしている。

5. 二流ホテル礼賛

今回バリ（ウブド）で泊まったホテルは、数多ある二流クラスの一つである。部屋数は14で、朝食つき税サ込で2000円弱、このクラスのホテルとしては、決して安いわけではなく、むしろ少々高い方かも知れない。従業員は5名（男3女2）の交代制で、常時3～4名が働いている。彼等は18～31歳と若い。結婚しているのは一人だけだが、他の4人全員に恋人がいる。彼等の仕事は、朝食の準備をして部屋へ運びこむのと、清掃にベッドメイキング、夕方お湯を沸かして部屋へ配ることくらい。その他には時々洗濯、庭の草刈程度で大した用事は無い。従って掃除が済んだ後は暇でお喋りしたり、眠ったりしている。

彼等のサービスは実にいい加減で掃除は丸く掃くだけ、ベッドメイキングは素人そのもの、コーヒーカップは欠けているなど、日本流に考えると欠点のオンパレードだろう。とてもプロのサービスではなく、アマチュアそのものであ

る。それで居心地はどうかと言うと、これが快適なのである。彼等は確かに気は利かないし動きも遅い。しかし、こちらもそんなに急ぐ理由は何も無いし、ベッドメイキングが少々下手でも実際には何の支障もないのだ。日本のように効率、効率と言っても人は過剰なのだし、効率を追求する必要は全くない。しかも抜けていることは頼めば、即刻実に気持ちよくやってくれる。彼等は明るくしかも礼儀正しい。暇な我々との格好の話し相手で、バリの習慣やマナー・結婚式や葬式・町のお祭りなどの行事の情報・恋人との関係・物価情報等々、何でも教えてくれる。彼らは日本語も結構解るが、込み入った話は日本語では無理。しかしこのホテルには、4～5年滞在している日本人女性が2人いて、複雑な会話は彼女達が通訳の役目も果たしてくれるので、言葉面でも何の不自由もない。

彼らに頼めば地元民価格で果物なども買って来てくれるし、買い物に行くとと言えばバイクで送ってもらえる。少々チップを弾めばお互いがハッピーという次第。チェックアウトに際して2人から饞別を貰った。金額にすれば数十円の他愛のないものだが、何よりもその気持ちが嬉しい。

確かに一流ホテルのサービスは望めないが、一流ホテルでは絶対に望めない彼らとの交流がある。これは金では買えない。日本流の価値観さえ持ち込まなければ、これほど快適なホテル生活はない。次回も是非このホテルに泊まって彼らと再会し、馬鹿話に花を咲かせたいと念じている。

6. 男女の仲

バリには初めて来て滞在も僅か3週間と短いですが、男女関係について大いに考えさせられた。男女関係と言っても様々な形態が考えられる。

- ・バリ人同士と日本人同士のカップルの違い
- ・日本人とバリ人のカップル、タイ人やフィリピン人と日本人カップルとの違い

これらの関係について感じたことを記しておきたい。

①バリ人の結婚前の男女関係は誠に大らかだ。彼氏や彼女を友人知人に公開するのは当たり前で、日本のように出来るだけ秘密裡に進めようなどとは、露ほども思わないものらしい。日本人なら、男女の仲に発展する場合は、特に内緒でことを進めるのが常識であろう。ところがバリでは、少なくとも私の周辺で見受ける人たちの男女関係は実にアッケラカンとしている。私の泊まっているホテルの従業員は、男3人女2人の計5名で、彼等は一人を除いて全員独身だが皆な恋人がいる。しかも頻繁にホテルにデートの為やって来る。見ていると勤務中とか休憩中とか関係ないように思える。中には従業員の寝泊りしている部屋に泊まっていくケースも度々あるようで、そのことを皆でわいわい言いながら冷やかしている。日本人の感覚では信じられないことだが、彼等は実に明るいので非難しようという気にはさらさらならない。

②バリ人と日本人のカップルの大半は、女性が日本人でバリ人男性との組み合わせだ。年齢は若く、従って金銭的には必ずしも恵まれてなく、夫婦で懸命に生活に取り組んでいる。しかもバリの伝統的な村社会に適応するため、相当の苦勞を強いられている場合が多いようだ。

一方タイやフィリピンではその逆で、日本人は男性で、しかも高齢者、特に年金生活者が多い。そのため金銭的には恵まれていて、生活をエンジョイするのが主目的で、生活費は日本人男性が賄っているケースが圧倒的に多い。

③バリに魅せられる若い日本の女性は大変多い。特に芸術や音楽を目指す女性ほど熱っぽい。その気持ちも、僅かの滞在ながら、何となく分るような気がするくらいバリは魅力的なところではある。こうした日本女性がバリの男性の優しさに触れ、恋愛から結婚へと進むのも自然の理なのかも知れない。しかしこの結婚にも二つのケースがあるように見える。

- ・一つはバリに数年間生活し、しっかりした考えを持って結婚に踏み切るグループ
- ・もう一つは旅行で来て、一時的な出来心で安易に男女関係にまで発展し結婚するケース。こ

の場合バリ人の開放的な男女関係の影響も、多少影響しているのかも知れない。中には男漁りが目的で来て、ジゴロの餌食になる馬鹿者も結構多いと聞く。何をかいわんやである。

現在のバリには、幸せを掴んだ沢山の日本人妻達がいる。これらの人は、前者のグループで、苦勞と努力の末に掴んだ幸せなのである。私が今回接触した人たちは幸いにも、このグループの人たちばかりであった。

一方後者のケースでは、殆どが不幸な結果に終わり、中には悲惨としか言いようのないケースも多々あったと聞く。こうしたふしだらな日本女性が、最近とみに増しているのは、日本が経済の発展と引き換えに背負い込んだ精神面での病巣のなせる業であろう。

バリ人の頑固なまでに伝統を守る姿を見るにつけ、効率一辺倒のアメリカ文化だけでなく、日本独自の伝統をもう少し大切にし、潤いある生活を取り戻さなければ、精神的アンバランス人間がますます増えていくのではないかと想いを巡らせた次第。

7. 費用

アジアの魅力の一つは物価が安く、年金の範囲内で結構いい暮らしが出来ることであろう。最後に 22 日間の滞在費用をご覧頂いて独断と聞きかじりの拙い文章を終えることにする。

★総費用	252,400 円
(内訳) 航空券・関空利用料	: 123,900
インドネシア入出国税	: 7,900
ホテル(21泊)	: 50,300
外食費(延べ58食)	: 31,400
観光費用	: 16,800
現地での交通費	: 10,200
その他雑費	: 11,900

外食で昼食の平均単価は一人当たり 480 円、夕食は 620 円

(注) 二人分の費用で単位は円
(1000 ピア=12 円で計算)
(お土産代は除く)

●お断り 文中「バリ」と表現している部分が沢山ありますが、ウブドしか見ていませんので全てウブドと読み替えて下さい。

メーリングリスト

最近、会員の方々から、フィリピン退職庁の特者ビザ(永住ビザ)取得にあたり従来5情報がながれていますが、退職庁のマルセロ部長に真偽をただしました。同部長によりますと、近隣諸国のビザ入手件に対抗すべく、減額する方向で検討しているが、いつから、どのように制度変更するかは未定である。やるとすれば、マーケットター(手続き代行業者)通じ最低5名一組でのビザ申請が条件となり、最初の一年目は一人、1万ドルを払い、翌年には更に1万ドル払うこと。本人一名で合計2万ドルの預金を要請するという事です。減額変更するならば、現ビザホルダー(5万ドル預金でビザを入手した人)への調整をどうするかとの間には、答えをもちあわせておらず、この減額制度変更は紆余曲折あると見受けました。現制度では、御承知のように、50歳以上は5ドルの定期預金(6ヶ月間、一定の金利つきで銀行でキープされるが、以降はその金を家屋購買など投資に使用可)35歳から49歳までは7万5千ドル預金が必要です。3人目の同伴扶養家族から、1名につき1万5千ドルの預金が必要です。

以上です。

南太平洋サモアへの旅

愛知県在住 会員 No. 643 鈴木憲介

タロファ こんにちは、南の会の皆さん！愛知県在住の No. 643 鈴木です。

昨年の秋季号で初めてサモア島の事を紹介しました。覚えておられる方も多いと思います。

今回は昨年の旅からちょうど1年が経ち、3人の仲間とともに4/22-5/21にかけて昨年と同じルート、フィジー経由でサモア、トンガと回って帰ってきました。3週間居たサモア島で2つの大きなハプニングがありました。

とても示唆に富んだ今回の旅行でした。サモアンやトンガンのよく使う E! Moi? や OkaOka という言葉を交えてお伝えしたいと思います。一え！本当？ それは大変だったねーという意味です。

今回の旅の目的はサモアの家族に会うこと、ノニ（ノヌ）と言う南洋の木の実の健康ジュースの調査、サモアに定住するための調査、そして仲間とともに楽しいひと時を持つこと等。

旅程（1ヶ月）名古屋→フィジー（1泊）→サモア（3週間）→トンガ（3泊）→フィジー（1泊）→名古屋帰国。いずれもソウル経由。同行者；神戸の友人K氏（72歳）、60歳前半の姉さん夫婦の4人。

費用 名古屋フィジー間 ¥82000

フィジー→サモア→トンガ→フィジー ¥57000

（フィジーサモア往復は¥54000）なお同じ時期に旅行された方で Narita-NZ-Samoa 往復が12万円、ソウル経由。今後の参考にしたい。



今回旅行した面々。左からK氏、姉さん、現地の白人P氏（日本語上手）、姉さんのダンナさん。右上はサモアン（歯医者）と私。

宿泊 フィジー-Dominion Int Hotel ¥5400

サモア-Vaiala Beach Cottage ¥5500 知り合いのNZ人の経営でディスカウント料金。姉さん夫婦宿泊、1棟建、緑のなかで居心地満点。

トンガ-Captain Cook motel ¥5500

いずれのホテルも熟年旅行者にとって満足した設備、料金のような感じでした。

フィジー経由は昨年と同コースということもあり現地トラベルエージェントと顔見知りであることから比較的スムーズに運びました。泊まったドミニオンホテルもきれいで設備も行き届いており満足しました。エアポートから送迎があるので気が楽です。

サモアには朝早く着きました。嫁さんが待っていてくれました。軽くキスをしご無沙汰の侘びの後、アピア市に向かいました。姉さん達は嫁さんが日本で住んでいたときに会ったこともあり格別の再会の嬉しさがあつた様です。

その着いた日はアピア市の自宅で持ってきたお土産の開帳をしました。時折混じる変な英語・サモア語・日本語でおかしく楽しく時をすごしました。

夕方になるとヤモリが光にあつまってきます。1匹2匹と数えていた姉さんのダンナの顔がひきつりました。その数ギョギョ OkaOka、20数匹を数えました。彼にとっては異常なサモア初体験であったようでした。大切に飼っているわけではないのですが、蚊などを食べてくれるヤモリを殺すことはありません。彼にとっては最初のカルチャーショックだったようです。

次の日、サモア来島歓迎の意味で市内の或る洋食レストランで私達4人それに嫁さん、息子（20歳）と共に行きました。ここでオーダーしたのがビーフステーキやロブスター、野菜炒めなどでした。問題はステーキにありました。現

地の肉は硬く脂身も多いようです。彼はよく切れないとブツブツ言いながら食べていました。

そのうち OkaOka ウエ！グエ！えたいの知れない声をあげはじめ、ましては顔も蒼白です。唇だけ土色でよだれや汗が出て苦しそうです。小さく切れなかった脂身がのどに引っかかったのにすぐ気づきました。

こんな時一番しっかりしていたのは姉さん、嫁さんの女性陣でした。肩をたたいたり水を一緒にのむように勧めたり、そのうち嫁さんは救急車を頼みにレストランの電話に走りました。おろおろしているのは私達男性ばかりでした。

そうこうしているうちにストンと肉は胃袋に落ちたようです。このときばかりは肝を冷やしました。ホッと胸をなでおろしたのは言うまでもありませんでした。OkaOka こんな異国の地の果てで死んでしまっは大変です。

E! Moi? 旅の真ん中でアキレス腱を切る。サモアの藪医者インド人？（一つめのハプニング）

サモアの旅も10日目と落ち着いたころです。私は知り合いのサモアン歯医者に行きました。日本にいる時から奥歯の虫歯のつめものが外れていたのでもサモアで修理？しようと思ってたからです。彼は昔からのテニス仲間です「おーケン良く来た」と大歓迎、しかし歯垢取りや詰め物をした後の支払いはバッチリとられました。2時間も入念にかけて¥6000、これはその後の足の治療費を思うと果たして高かったのか安かったのか？

2日後にプレイしたテニスは一年ぶりでした。「まだケンは腕前が衰えないよ」などとゴマすりを言われその気になっていた最中、左足カカト部に閃光のような激痛がはしりへなへなとなる私。両足で立てない！！ OkaOka えらいこっちゃ！左足がブランブランとなりました。次の日、国立病院にいきました。名前は格好がよいのですが 現地人のための病院です。OkaOka 7時間！！も待たされました。サモアのボランティアと思しき藪医者インド人はX線写真を見てま

ず骨の折れてないことを確認しました。足親指のわずか動くことを見て、腫れの予防薬を処方、包帯できつく縛ることを指示されました。痛くて松葉杖を必要としましたが、病院にはそれもしかも包帯も無く、OkaOka 次の旅行先トンガ・フィジー・日本まで痛ーい痛ーい、びっこでひよこひよこ歩きまわったのです。頭の中には、もしかしたらという予感があったのですが、とにかく日本に帰ったらすぐ病院に行こうと思いました。帰国した後、あまりにも痛く腫れも引かなかったので数日後外科病院へいきました。OkaOka アキレス腱断裂の診断、即入院・即手術、数ヶ月のリハビリ治療生活を余儀なくされることになったのです。普通アキレス腱が切れた時すぐギプスで固定という処置をすればよかったです。私の場合はそのまま17日間も放りっぱなしにしていた為、切れた腱は離れて縮まっていた。今でも10CMの手術痕があります。

現地には私立のクリニックもあります。待ち時間も少ない代わりに高額医療費が請求されます。いずれにしても今回なんらの保険にも入らずに旅行していることが問題でした。今迄こんな怪我もすることもなかったし、まず若さがあったので病気に対してあまりにも無防備でした。とても示唆的だったと考えています。

海外に行く時には、

1. 保険をかける。
2. 適切なる病院で処置を早く受ける等など。

今回の旅では同行者にも危険がありました。

まず姉さん夫婦達と珊瑚の海にいきました。綺麗な珊瑚で感嘆するのつかの間、兩人とも浅瀬にもかかわらず足を取られ転び、擦り傷の怪我をしました。帰ってからすぐ消毒したので大事にはいたりませんでした。ただ姉さんのダンナさんはサラリーマンで東京で生活している為か足腰が弱く、珊瑚で足をとられてからフラフラと足元がおぼつかなくなりました。たったの20-40cmの浅い海にもかかわらず50M近く私が肩を抱き抱えながらほうほうの体で

岸に引き上げました。まあ何事も無くホットしました。

また神戸の友人が我が家で濡れたタイルの上で足を滑らし頭と手を強く打つハプニングがありました。打ち身で済んだので「タイルの職人さんなんだがのー」と、笑い話になりました。

また20歳の息子が家からタクシーで町にショッピングに行く途中、乗った車で交通事故にあい、あわや??というところでした。側面から他の車がぶつかり彼の頭がドアのフレームにしこたまぶつかったということでした。フレームは折れ曲がったとの事です。次の日、頭をおさえ、痛い、吐き気がするなどというので、一時心配でした。結局事故の起きたショックで脳が揺さぶられた為と判ったような判らないような説明がサモアドクターからありましたが。

しかしいずれの事件をとってみてもこのようなことは日本にいても起こりうる事故なので海外にいる時は更に細心の注意が必要ということ肝に命じました。それと残念ながらも私も若くはないということも再認識しました。

さて2007年にサモアがホストで南太平洋スポーツ祭典が行われるとのことです。今回スイミングプール、ゴルフ場などがこのために建設・整備中でした。

E ! Moi? ゴルフがなんと世界一安く回れる。?? 18ホール ¥320 ファレアタゴルフコース。

そうなんです。私も驚きました。聞くところによると、ゴルフ奨励、いわゆる現地に安くゴルフをしてもらい有望選手を育てるためなんだそうです。我々外人も安くラウンドを回れる恩恵に浴します。その他の詳しい費用など聞いた範囲では、まだ始まったばかりでキャデーさんはいないとのこと。カート代¥1200、9ホール回って¥200、アピア市からタクシー代¥300、日曜日11AM-7:30PMまで、平日6AM-7:30PMまでとの事です。世界一安いゴルフ場です。皆さん機会があればどうぞ。

ノニ(ノヌ)ジュース (モリンダシトリフォリアの発酵ジュース) と言う言葉が最近巷で聞かれるようになってきました。

実は私は現在このノヌジュースにはまっています。サモアのノヌはノニとも呼ばれ日本で大変ブレイクしているようです。E ! Moi? 成人病に大いに効く様子。??今回の旅の調査でもありました。ということでノニ工場の見学をサモアとトンガでしてきました。

私も2年近くこの実の発酵ジュースを飲んでおりこのおかげで健康ライフ。血液の浄化作用で成人病の予防に絶大なる効果を発揮。巷には健康食品が山ほどありますがこれは効くーと最近特に思うようになりました。日本では値段が高いですがここサモアではそこいらじゅうノヌの実だらけ。わたしが健康になった、こんなことからすばらしい南国の不思議な果汁をなんとか日本に海外にもっと安く供給できないかと考えている次第です。なお木の実にはハワイ、タヒチやインドネシア、フィリピンにもあります。

E ! Moi? 去年は名古屋の友人がノニジュースを飲んだらすぐその翌朝、性的に元気が出たとのことで「サモアに一緒に行こう」となりフィジーまでの旅費をみてくれました。このようなこと私にとっては大歓迎ですが今年はそのような事はなく実費でした。

高血圧・糖尿、その予備軍・肥満・癌・神経痛・アトピー・アレルギー症・水虫・性欲減退・関節炎・心臓肥大・疲労・痔(切れ痔)・腰痛・便秘などがキーワード。これらに気になる方はノニジュースを試してみるのも一考と存じます。

ひよんなことで同じ時期に来ていた日本からのNPOの方の依頼で身体障害者養護施設を見学(通訳)をしました。包帯・松葉杖・車椅子・絵本・工具などの寄付を海外から歓迎します。巡回用マイクロバスが欲しいなどのずうずうしい要求もありました。ここに収容される子供達は5歳ぐらいから20歳まで。算数やそろばん・折り紙・日本語やお土産品の技能を教えたりなどボランティアに希望ある方に居住ビザ

も可能と思います。要検討と思いました。

それと今回の最大目的は家族に会うことでしたが実は嫁さん息子達が我々滞在5日目にしてOkaOka ニュージーランド(クライストチャーチ)に移住(2つめのハプニング)してしまったことです。前々から移住の件は聞いてはいたがいざ実行となると何か寂しく、またファミリーがバラバラになることを危惧しました。息子はNZに行ってからここでは実力は発揮できないとわかるとすぐサモアに戻りました。嫁さんはNZの永住権は取れたとのこと。という事は私も取れるということらしいです。OkaOka いとも簡単にやってしまうのがサモアンチック。やはり海洋民族のDNAが騒ぐのか？なせるわざか？と思わざるをえません。

サモアンに限らずアイランダーはNZやオーストラリアはてはアメリカに行って仕事を、生活のレベルを向上させるのが常です。また残ったファミリーに送金します。おりしもすぐ下の妹がクライストチャーチに住むのでそこを頼って行ったわけです。嫁さんと下の息子がこうなった以上、今後はNZも移住のターゲットと捉えようと思っております。やはりファミリーは離れて暮らすのではなく一刻も早くサモアなりNZなりに行き、彼らとともに生活をしなければと考えています。

たまたまクライストチャーチは日本のリタイア組に人気があります。南の会の方々の中にもNZと考えている方がいらっしやると存じます。NZには25年ほど前一度行ったことはありますが、移住という目で捉えていませんでした。考えようによっては面白い展開になるやもしれません。

最後に今回の旅はいろんなハプニングに見まわれ考えさせられる旅でもありました。姉さんたちは一様に初めてみるサモアに異国情緒を満喫した楽しい旅であったようです。

特にただ単にホテルに泊まるだけではなく壁のないサモアンの家に泊まったり片言の英

語でサモアンと会話したり、民宿したりしてデープに現地に入った旅行であったので感慨はひとしおでした。

なお私は、日本に帰ってからアキレス腱治療の為約2ヶ月の間ギブス・サポーター生活となりました。今でも不自由な生活を強いられています。総括すると今回の旅は私にとってはレアガ(悪い)、姉さん達は感激はあったのですが怪我などしているので、フィヨロロ(悪くもなく良くもなく平均点)だったようです。

この際、ヒマな時間を利用して私のファミリーなるもののホームページを作ってみました。
http://www.geocities.jp/kensamoa_9953/sub-a/ijyuu.text.html



サモアの家でハイポーズ



最近のゴールドコースト

神奈川県在住 No. 586 磯崎興志

1 ゴルフ事情について

(1) 一般的なこと

①過去10年間は1ドル(=オーストラリアドルのこと)60~100円で推移していたが、現在は80円見当。トラベラーズチェックは割安。

②どこの国も同じであろうが日本語で案内してもらうのは高い。送迎付きのゴルフも高めで2~3日の短期でも、3ベッドのコンドミニアム宿泊で200ドル前後(ホープアイランドなど)である。

ゴルフ場へは基本的に自分で運転して行くのがいい。国際免許証が必要。運転そのものは日本より簡単。レンタカーは、1週間借りても300ドルもかからない。ここ2年、諸物価は値上がりの傾向があるが、レンタカーは安くなっている。

道路がわかりやすいので、地図がなくても大丈夫。30分以上かかるゴルフ場は遠い感じ。

③予約は、前日または、当日朝でもよい。ただし、韓国や中国からの団体が多い季節は別。キャンセルは自由で罰金はない。

④ゴルフ教室は各ゴルフ場にあり、英会話練習も兼ねてと考えると高くはないかもしれない。ちなみにゴールドコースト日本人会(TEL5531-6661)の会長、平野さんはティーチングプロでもある。月1回シニアコンペがある。

またゴルフ場にある練習場が素晴らしい。天然芝の上からアイアンの練習ができる。バンカー施設も格段によい。

⑤グリーンフィーはビジター価格と年間会員価格があり、季節やスタート時間、同伴会員の有無で異なる。ホテル併設コースは、宿泊客割引もある。

日本の諸雑費に当たる負担はなくグリーンフィ

ーとカート代のみである。2人乗りカートは10~15ドル。50ドル以上のコースでは、カート代が含まれることが多い。

またキャディーはいない。パブリックコースは安い、混むことが多い。午後のサンセットスタートは、割安であるがまぶしくてボールを見失うことがままある。

⑥1か月だけの会員価格もある。例えばロイヤルパインズは2人で1か月535ドル払えばいつでもプレイができる。ロビーナとコロニアルはどちらでもプレイができて、2人で1か月895ドルである。こちらはクーポンで10%割り引きなどもある。

高額のコースを除いた年間会員価格は、一般的には入会費は500~1,100ドル(4万円~9万円弱)、年会費は700~1,750ドル(6万円弱~14万円)だ。

(2) 主なゴルフ場について

以下ゴルフ場名・グリーンフィー・サーファーズパラダイスからの車での所要時間・簡単な説明の順に記す。

①エメラルドレイク……37.5ドル 20分
夜間照明あり。

②ゲインズボロー……60ドル 40分
やや狭いが自然環境は素晴らしい。あちこちにカンガルーがいて芝刈り機の役目を果たす。当然糞も多い。

③レイクランド……160ドル 20分
芝が非常によい。ゴールドコーストで1番のコース。価格が高くなった。

④ホープアイランド……120ドル 35分
やや遠い。36ホールある。

⑤グレイス……150ドル 25分 ノーマンが設計したコースで距離がありバンカーも深い。会員しかプレイできないようだが観光案内のパンフレットに掲載されている。

⑥パームメドウ……115ドル 20分
レイクランドの隣にあり段々悪くなっているコース。以前は大京所有。最近ラフ火災あり。

⑦コロニアル (パラダイススプリング) ……
87ドル 20分 池が多く意外とタフ。

⑧パークウッド……35ドル 25分 パブリック的雰囲気。安いのでやや混む。少し狭い。

⑨ロビーナウッド……99ドル 25分
ベント芝で起伏が多く難しい。

⑩ロイヤルパインズ……110ドル 20分
日本人の経営で大衆的、最近36ホールを18ホールに縮小。雰囲気は、厚木国際並み。カートに距離計器ついている。

⑪サンクチュアリー……85ドル 40分
格調は高いが、遠くて高い。36ホール。会員専用コース、同伴は可。日本人有名人の亡霊？がでる。

2 新退職者ビザについて

—2004年1月1日改正—

(1) ビザ取得の条件

- ①夫婦どちらかが55歳以上
- ②配偶者以外に扶養家族はいない
(子供は独立していると宣言すれば良い)
- ③週20時間以上は働かない
- ④健康診断、レントゲン検査の結果異常なし
(古い完治した肺尖部陰影も引っ掛けて自費での再検査になる→日本オーストラリア大使館指定病院の再検査ビジネスになっている)
- ⑤無犯罪証明書
(都道府県の警察署で発行してもらう)

⑥オーストラリアの会社の医療保険に入る
(夫婦2人で、年間30万円ぐらい)

⑦資産証明

イ；年金を現在受給していない者

87万ドル (約7000万弱)

ロ；年金受給者

・35万ドル (2800万円) +

5.2万ドル (420万円弱一年間収入)

以上の年金受給証明

・または投資の収入証明

(2) 個人的な意見

①申請業者の詐欺に合わないこと。3000ドル以上は吹っかけである。

②資産証明は簡単。100万を80回送金すれば8000万円の残高証明になる。そして自己不動産を英訳すればいい。

③健康診断を受けるときは体調がよいときを選ぶ。肋膜炎の既往ある場合は、受け持ち医から結核が無いの診断書を付ける。日本は結核危険国との判定をされている。

④リタイアメントビザのメリットは不動産を買う場合以外はあまり無い。新築だけではなく中古物件も含めて買えることと、3か月単位で出国しなくて済むくらいである。各種技能、学生ビザもあるのでそれらも検討したい。

⑤すべて、日本オーストラリア大使館のホームページからのパソコン処理でできる。従って係官から直に説明を受けることは難しい。申請後、大使館のスケジュールに従って処理されるので個人的に進行状況を把握することは難しい。

⑥ワーキングホリデービザで入国した日本人女性が現地で結婚し、観光ガイドや旅行社の社員、銀行の窓口などで働いているケースが多い。

以上

パース、シドニー、ゴールドコースト各都市3ヶ月、 合計9ヶ月間、ホームステイして英語留学—そのII

東京都在住 会員No.417 木内 登希晴

ホームステイ。半分はハズレと思うべし

2003年9月末。楽しかったパースでの3ヶ月の英語研修を終え、シドニーへ来てから、早くも24日間になる。この24日間の内、妻がシドニーへ有休でやってきた9日間を除いた15日間（約2週間）という期間は、私の60年の人生の中でも、かつて一度も味わったことが無いほどの屈辱の日々というか、堪え難い苦痛の日々というか、人生最悪の2週間とも言えた。不整脈を調整する薬を1日に朝晩2回飲んでいますが、夜になるともう一度飲んだりすることもあるほど心臓に悪い体験だった。なぜなら…。

パースからシドニーへ移動して、ある1軒のホストファミリーのお宅に着いたのだが、この家に着いた瞬間、まず驚いてしまった。ここはホストファミリーとは決して呼べない下宿屋さん、もしくは学生寮のような家だったのである。若い男子学生が6人も一軒家に住んでおり、他のアパートには3人の女子学生の面倒もみていたのである。ホストマザーはイラン人の独身の老人女性。彼女と彼女の一人息子の二人だけで9人もの学生の食事を含めた生活の面倒を見ながら、あたふたとこの家の経営を切り盛りしていることだった。海外の留学生にオーストラリアの良き家庭を通じてオーストラリアを大好きになってもらおうという計らいも、この家にはまったく当てはまらない惨状がそこにあった。

シドニー地獄のホームステイ体験

6人のバス・トイレは一ヶ所だけ。シャワーはバスタブの真中に付いており、シャワーの蛇口がバスタブの狭い幅の方を向いている。シャワーカーテンは付いておらず、お湯を外にこぼさないように入るには相当工夫がいる。悪く言えば、お湯を大量に使わせない巧妙な仕掛けのようにも見える。バス・トイレの床はいつもびしょびしょに濡れており、バスマットすら無いので、シャワーを浴びた後も足の裏を乾かすこともできず、なんだか気持ちが悪い。

更に驚いたのは、私の部屋に初日に荷物を整理して入れようとしたら、もう既に洋服ダンスの中に、誰かの下着からシャツから上着まで入

っているではないか！個室を頼んだはずなのに、相部屋なの？！と心底驚いてしまい、これは大変なことになったぞと思った。これではプライバシーが無いと文句を付けると、彼の部屋には洋服ダンスが置けないから、しばらくの間我慢してくれと言う。初日からもう話にならないスタートなのである。結局この洋服ダンス共同使用は、私がこの家を出るまで続いた。

物置ほどの狭い部屋、地下にある薄暗い部屋、自分の寝室や、息子の寝室までも学生達に貸し出し、自分たちはソファで寝ている有り様である。ホストマザーはオーストラリアが好きになるように生活の補佐をしてくれるものと思っていたが、このイラン婆さんは、業つくばりの金儲けの亡者で、何か喋れば、あれはするな、これはダメ…とダメ出しの言葉だけ。年輩で、理屈で言い返す私などは、最も嫌われ、この24日間一度も名前を呼ばれたことが無い。



写真： I miss you. I miss you. さみしいよ—————っ！！！！

お金を払ってイヤな思いをするなんて、まっぴらゴメンだ！ こんな家、早く出てやる！

やっと留学したのに、毎日が実に空しい！

さみしい、さみしい、さみしいよ——っ！
毎日がさみしい！ 毎日が実に空しい！
学校が終わると家へ帰らなければならない。この家へは早く帰りたくないのだから、なるべく外で時間を潰そうとするのだがそれも限度があって、結局帰らなければならない。帰ると、必ず何かイヤなことが3つや4つ待っている。

学校へ行くとき閉めておいたはずの窓が少し開いていたり、小さな椅子が無くなっていたり…、イラン婆さんが明らかに部屋の中をチェックするために入った状況が明々白々なのだ。このイラン婆さん、各人のゴミの中味までチェックしているようなのだ。この家にはプライバシーという言葉がまったく無いのです。

1週間後に貰ったカギで自分の部屋に入ろうとするとイラン婆さんが小走りに駆け寄り、挨拶もなく、いきなり「あなた部屋の中でタバコ吸ってないでしょうね！」と、私を100%信じていない言葉をかけてくる。「私は部屋の中では絶対にタバコは吸わない！！」と少々声を荒げて言うと、イラン婆さんはプイと向こうを向いて何も言わずに居間の方へ行ってしまふ。

この家には、信頼関係という言葉がまったく無いのです。イラン婆さんの顔を見るのもイヤなので、部屋の中でじっとしていると、ドアをコンコンと一応はノックはするのだが、私がイエスの返事をする前にドアをガバツと勝手に開け、私の知らない外部の人達に、「この部屋が一番大きい部屋です。どうです！借りませんか？」などと、いきなり部屋のセールスを始めたりする。

この家にはエチケットとかマナーという言葉が無いのです。夜に、いきなりドンドンとドアを叩くので、何事が起きたのかと驚いてドアを開けると「あなた、洗濯機の洗剤を勝手に使ってるでしょ！洗剤は自分で買いなさい！」と絶叫調で言う。この家に到着して2日目に洗濯をしたとき、それを言うべきなのに何も言わなかったのが当然洗剤くらいは置いてあるものを使っていいと思っていたら、3週間も経つというのに、別に夜遅くに言わなくてもいい内容なのに、やたらめったら言いがかりをつけてくる。この家には大人に対する配慮という言葉がまったく無いのです。

地獄のホストファミリーから、理想のホストファミリーへ

エージェント経由で学校の担当者にクレームを申し立て、英語圏の言葉を喋る、子供のいない、良識あるオーストラリア人家庭で、インターネットができる電話回線を使わせてくれる評判のいいホストファミリーを紹介して欲しいと注文を出した。やはり言うべきことはしっかり相手に伝えておかないといけない、ということを経回は痛感させられた。

新しいホストファミリー宅に着くと、玄関先で優しい喋り方をする若奥様が現われ、「良くいらっしやいました。あなたを今日から我が家に歓迎しますよ」と肩を抱かんとばかりの様子で温かく迎え入れてくれた。大きな新築の家で、トイレとバスが自分の部屋に付いているきれいな部屋に案内され、これがあなたの部屋です。どうぞこれからは、あなたの部屋だと思ってくつろいで勉強してください、と言われた。前のイラン婆さんのはちゃめちな家とは大違いである。

私の名前をTokiと呼んでくださいと告げると、何か喋るたびにToki、Tokiと呼んでくれる。「これだよこれ！世界の少年少女が夢のように抱く理想のホストファミリーは、このことだよ！」と内心思った。到着直後、さらに驚いたことがあった。若奥様と玄関先で話していると、その話し声を聞きつけて2階から降りてきたスイス人の可愛らしい女の子が、なんと同じ学校の、同じクラスの、いつも私の隣に座って授業を受けているキアラという女の子だったのである。

以前授業の前なんかには、私の住んでいるホストファミリーは最低で、変わりたい、変わりたいと苦情を聞いてくれた女の子だった。彼女の口から「私のホストファミリーは最高よ！」と聞いていたので、いつもうらやましく思っていたのだ。それが、いざ変わってみると、彼女が住んでいる同じ家だったのである。

妻が有休を取ってシドニーへやって来た

2003年9月27日、妻の久美子が9日間の有休を取ってシドニーへやって来た。私が日

本を発って、約3ヶ月ぶりの夫婦の再会である。外国で妻に逢うということが、今回日本で体験したことがないほどの新鮮なものだった。世界中に160億もの人間がいても、最も身近かな女性と言えるのは一人だけ。歳をとろうが、皺が増えようがベターハーフという言葉があるように、半身と呼べるのはこの人だけなのである。

外国で沢山の知らない人ばかりに囲まれて、たった一人で修行僧のように生活していると、今まで見えていなかった身内の存在の貴重さが痛いほどよく見えてくる。東京にいたときは、馬鹿だチョンだとののしり合うこともあったが、随分と無味乾燥な時間を過ごしてしまったなとも思う。ロングステイを志向するこれからは、夫婦二人の関係も、もっと濃密で、豊かな内容にしないといけないと痛感した。



写真：妻が9日間の有休を取ってシドニーへやって来た。日本を発って、約3ヶ月ぶりの夫婦の再会である。

ビザは、6ヶ月の観光ビザが便利

私の場合、午前中の授業のみを受講しているので、週の授業時間が20時間以下となり、学生ビザを取るができなかった。観光ビザは3ヶ月と6ヶ月の2種類があるが、私の場合は6ヶ月の観光ビザでオーストラリアへ入国した。その6ヶ月の観光ビザの有効期間が切れるぎりぎりにきていたので、いったんオーストラリアを出国し、ビザの日付を更新する必要がある。インドネシアのバリ島へ

行くか、ニュージーランドへ行くか迷ったが、最も近いニュージーランドへ行くことに決めた。実は、14年前、私の住む中野区とニュージーランドの首都ウエリントンが姉妹都市になっており、中野区内の小中学生を30人ほど隔年で交換留学させる制度があった。中野区の学生がウエリントンへ出向く順番の時、付き添いの大人の中にお父さんが一人付いて欲しいという要望があり、私が父親の代表ということでウエリントンへ行ったことがあった。その時私が泊まったロリング家とは未だに時々交際があり、しかも当時そのロリング家にいた大学生だったブレントという大男の学生を数ヶ月後に東京の我が家に2ヶ月間ホームステイさせたという間柄の知人がいたのだ。

今回はそのロリング家を訪問し、旧交を温めながら、同時に観光ビザの更新をすることにした。実際にロリング家を訪れて見ると、14年後の訪問だったので世代が交代しつつあるような時代の変化を感じた。当時小学校低学年だった息子の同級生が、政府のお役人になっていたり、当時大学生だったブレントが中古の一軒家に愛らしい彼女と一緒に生活していたりして、我が子の成長を見るようで、とても楽しい2週間を過ごすことができた。しかもオーストラリアへ再入国した瞬間に、また6ヶ月間オーストラリアにいられるビザを入手することができた。

ホームステイをやめ、一人暮らしの生活を始めた

パースではモウリーン宅に3ヶ月、シドニーのマンリーではフローラ宅に24日間、カルメン&マリウス宅に2ヶ月、ゴールドコーストのアラーナ&ラッセル宅には1ヶ月、合計7ヶ月、いずれもオーストラリア人のお宅にホームステイをしながら英語学校に通ったことになる。ホームステイをする場合、「英語圏の言葉を正しく喋る、良識あるオーストラリア人家庭で、子供がおらず、インターネットができる電話回線を使わせてくれる、評判のいいホストファミリーを紹介して欲しい」

と注文を出すようにしていた。

しかし、ゴールドコーストのホームステイ先を探すとき、うっかりして「子供のいない家」という条件を付け忘れてしまった。上記の3ヶ所のお宅にはいずれも子供がいなかったため、今度は子供くらいいてもいいかな、と思ってしまったのだ。案の定、4ヶ所目のお宅に伺ったら、16歳の女の子と12歳の男の子がいた。庭にプールのある家で、ご夫婦ともにとてもいい人なのだが、しばらく一緒に暮らしていると、時々親が子供に注意し、それに対して子供が言い返したり…というごくごく日常の何でもない家庭ドラマが毎日展開され、それを間直で聞いたり見たりしていると、なんだかとても疲れを感じはめたのだ。

私はもう子育ての時代を終え、やっとホッとして、これからは何にも束縛されず、自由奔放に生きようと思い始めている矢先に、子育て真っ最中の家庭に入ってしまったので、とても神経的に疲れるのだ。それと、大人に気を遣うのは気にならないが、子供にまで自然に気を遣ってしまっている自分に気がつき、時々イヤになることがあった。

他にも色々あるが、もう他人様の家にいることがとても辛くなってきてしまった。7ヶ月間も他人の家に、この我がままな私が、よくぞこれまでやってこられたものだと、自分の事ながら思い返すと感心してしまう。これからは、独立して一人暮らしの気楽な生活を楽しみたいと思うようになった。

最初はゲストハウスを探し回ったが、ここゴールドコーストは、ホテルかコンドミニアムかバックパッカーかといった具合で、ここには中間のゲストハウスという概念が無いのです。誰かと一軒家をシェアするのもイヤだし、アパートでも探そうと思った。色々探し回った結果、小さなワンルームのアパートへ引っ越すことができた。

街道沿いなので車の音がマンリーのイラン婆さんの家みたいにうるさいような気もしたが、もたもたしているところも他人が入ってしまいそうなので、とりあえず2ヶ月という

ことで入居を決めた。週220\$（17,000円）月7万円。ワンルームにしてはちょっと高い気がしたが、ホームステイをしても食事付きながら月7万6,800円するから、思い切って決めた。これで7ヶ月間続いたホームステイを終えて、他人を気にしない自分一人の生活が楽しめる自由な時間を手に入れることができた。自炊で面倒くさい時もあるが、スーパーマーケットで食べたいものを買い、好きなように自分で作って食べるという自由を手に入れた。



写真：ゴールドコーストで借りたワンルームのアパート。街道沿いで車の音がちょっとうるさいが、目の前に運河が見え、その向こうにマリナ・イマージュと

いう大きなヨットハーバーが見え、その左にシーワールドが見えるという、ゴールドコーストらしい景観の良さを優先させた。

思い立ったら、思い切ってやってみるべき

私達は子供達のように、もう大変身は出来ません。しかし、何歳になっても良かれと思う事は、中変身くらいは出来そうなら、思い切ってやってみるべきだと思うのです。私もこちらに来て9ヶ月が経とうとしています。家族と離れ、日本語の通じない世界で、独り身という何重苦のヘレン・ケラー状態ですが、まあまあ気分良く、楽しく過ごせた。

異国の家庭を間借り人の目で見ていると、日本では見えていなかった家庭のあり方、家族のあり方、夫婦のつきあい方…など、実に

様々な点で、改めて人間生活の原点を考えさせられた。東京にいた頃は、わがままばかり言っていた60歳のおっさんも、こちらへ来て、英語だけではなく、これからの二人の老後の生活のあり方さえも大きく変えるかもしれない、大変な人生勉強をさせてもらった。

私達の人生は、これからだ！

オーストラリア人の平均年収は4万5千ドル(360万円位1\$=80円計算 2004年)とされている。それにも関わらず、家は前庭があり、最低車が2台入る、物置きスペースと工作スペースが付いた大きなガレージがあり、広い裏庭にはプールまで付いているような大きな普通の家が、ここでは3~5千万円で買ってしまう。地価の高い日本から見ると、オーストラリアがラッキー・カントリーと言われている意味が実によくわかる。

このラッキー・カントリーに住みたいと考える日本人が非常に多い。ここゴールドコーストで知りあったある日本人の老人が、私達の夢を先取りするかのように、次のような話をしてくれた。「当時現役だった私は正直言って、私よりもはるかに年収が少ないオーストラリア人の同僚が、私よりも数倍、極端に言ったら数十倍もの豊かな生活を過ごしているのを見せ続けさせられた。何故だろうと疑問を持つようになった。

個人的にも親しくなった彼等に聞いてみると、住宅費(特に土地代)が安い上に、生活物価の全てが日本よりもはるかに安いことに驚愕してしまった。同じお金が2倍、3倍もの価値になる外国で私も暮らしたい、退職後の第二の人生を外国で過ごしたいと強く決心するようになった。確か45才の頃のことだったと思う。家内も、あなたが望むならばと同意してくれた」…と。海外へのロングステイを志向する私達のこれからの夢を、十数年も前から見事に実現されているその老人の自由に輝いた顔を見て、早くそうありたい、いや、もうその夢に確実に一步近づきつつある、と最近思えるようになった。海外でロン

グステイを始める前にまず英語を覚えたいということで、私の最初の計画では、パースで3ヶ月、シドニーで3ヶ月、ゴールドコーストで3ヶ月、そしてメルボルンで3ヶ月、英語の勉強をしようという計画だった。

しかし、パース、シドニー、ゴールドコーストで各3ヶ月ずつ実際に過ごしてみると、独り身の修行僧のような生活にはやはり限界があり、残りのメルボルンで3ヶ月の英語の勉強を、何も今計画通り続けなくても、これから海外へロングステイを始めたとき、その地で必要なら、また出かけた先の英語学校へ通えば良いではないかと思えるようになった。

正直言って、他人様の家に居候するホームステイだったり、独り身のアパート生活は、やはり妻がいなせいか、長く続ければ続けるほど味気なく思え、そろそろ日本へ帰る潮時が来ているのかもしれないと感じ始め、桜の咲く日本へ帰ることにした。

おわり。



南米の国ペルー

東京在住 会員 No. 655 島田栄一

昨年7月に入会した。私にとっての「南国」は今のところペルーである。

ペルーと聞いて「インカ帝国」(タワンティンスーユ)を想い浮かべる人が多いと思う。アンデスの地に南北5200キロに及ぶ広大な国家を形成したが、スペイン人の侵略で瞬く間に崩壊してしまった国「インカ帝国」。

その「インカ帝国」の国ペルーへは、ペルーに知人(流暢な日本語を話すペルー人)が居ること。そして、インカ文明への興味。

それから、小学生の時、社会科の時間に南米のペルー・チリ・ウルグアイの国々を調べて発表したことがあり、大人になったらこれ等の国へ是非行ってみたいとの思いが、歳月を隔ててもなお心に醸成していたのであろう。

これ等のことがペルー訪問のきっかけとなって、2000年4月8日～23日と2003年8月19日～9月10日の2回訪問した。

1. リマ(LIMA)にて

ペルーの首都リマへは、成田発→ロスアンゼルス経由→リマ着で行った。(直行便はない)所要時間は約22時間。

午前0時40分ホルヘ・チャベス空港に着いた。最初に目に入ってきた空港から市街地へ行く間の車窓から見た風景は、大変印象深いものがあった。

道路沿いに続く日干し煉瓦(アドベと言う)造りで赤茶けた色の低層建物、街のいたるところで溢れているスペイン語で書かれた文字やポスターの貼り紙、所々に建っているスペイン統治時代の面影を残す建造物。真夜中だというのに戸外に出て、話に興じる褐色で角ばった顔付の人々、継ぎはぎだらけの舗装道路を真っ黒な排気ガスを撒き散らし、クラクションを響かせながら疾走するポンコツの車、車、車。

それらが黄色味がかった街路灯の光に照らし出され、得も言われぬ雰囲気が漂う景観へと変貌する様子は、自分なりに描いていた南米への

異国情緒と重なり合い、これが南米の国ペルーだと思わず口にして、なんとなく嬉しくなった。もともと、真夜中だったので汚いものが目に入らないのが良かったのかも知れぬが。

<望外のオプションコース>

成田を2000年4月8日の夕刻に発ったが、日本との時差がマイナス14時間なので、朝目覚めてもまだ4月9日の日付に変わったばかりだ。

この日は3選を目指す日系フジモリ大統領と他候補との大統領選第1回投票日で、ペルー人の知人が投票に行くので一緒についていった。投票所は市内の小中学校で、塀越しに中を窺うと自動小銃を持った兵隊が厳重に警備している。もし何者かが投票所を襲撃したら銃撃戦に巻き込まれてしまうのかと不安になった。日本の投票所風景とは違う様子に些か驚いた。

帰りには、1997年当時、連日マスコミ報道のあった、あの「日本大使公邸占拠事件」跡へ行く。トマス・エジソン通りから跡地を望むと、既に建物はなく周りの高い塀が残っているだけで、3年前の人質救出作戦突入の銃撃戦があった現場とは思えなかった。

リマでの最初の行動が投票所、次が日本大使公邸跡の見学になろうとは思っても見なかった。

リマ旧市街には歴史的建造物が集中しており、「17世紀のコロニアル時代の繁栄を彷彿させる」との謳い文句で、「リマ歴史地区」として世界遺産の一つとなっているが、都市の中心には必ずあるマヨール広場(旧称アルマス広場)や、お決まりの大統領官邸、豪華な教会建築群が目に入ってくるだけで、取り立てて由緒があるような建造物は見当たらない。

市内の旧市街地(セントロ)より、最近では海に面した新興高級住宅街であるミラフローレス地区に人気が集まっていて、セントロの泥臭い喧騒とは違う処として、観光スポットにもなっている。(お世話になった知人宅はミラフローレスに在る。)

知人宅は、姉のエレナと弟のガブリエル（母親がメスティーソ「スペイン人とインディオ(先住民)の混血」で、父親がイタリア人)の二人住まい。姉はレストラン経営で、弟は魚油の流通関係の仕事をしている。エレナはレストラン用食材の買い付けを普段は店の使用人を連れて市場に行くのだが、そこは少し危険なので、私を同行させず私にはスーパーへ連れて行ってくれた。

野菜・果物は種類が多く山のように積まれていて、値段はKg表示で量り売りだ。因みに、人参はKg当たり1.15ソル(約40円)・洋梨はKg当たり2.29ソル(約80円)・アバガドKg当たり2.70ソル(約93円)等。又、水は1.6L入り2.5ソル(86円)・ビールは350ml入り6缶12.50ソル(415円)・ティッシュペーパーは1箱4.25ソル(148円)でティッシュペーパーが高いのに吃驚した。(2003年8月当時)

公共料金関連では、(知人宅住まい1ヶ月当たり)ガス代約10米ドル・水道代約7米ドル・電気代約40米ドル・電話代約70～100米ドル(ペルー人はお喋り?)・ケーブルTV約20米ドルで、電気代が突出して高いので各家庭では、照明を暗くして節電に努めている。また、公共料金を預金口座の引落としにすると、各料金につき約1米ドル手数料が掛るとの事で、毎月の支払い時期には、各公共料金窓口は長蛇の列が出来る。

<52>

知人宅には、インディオのお手伝いさんが通ってくる。彼女の旦那はタクシードライバー。郊外のブエプロホーベン(貧民街)と呼ばれている急造の仮住宅(バラック)に住んでいる。家賃は月40米ドル(公共料金含む)で一部屋に親子4人が生活している。

ペルーの人口は2670万人(2002年データ)で、メスティーソ(インディオと白人の混血)の割合は52%である。インディオの32%を遙かに凌ぐこの数値は、先住民族インディオに対し、1532年に始まるスペインの

侵略、その後のインディアス(アメリカ植民地)統治が、如何に凄惨で際立ったものであったかを物語っている。

インディオ・メスティーソ達の多くは、アンデス高地での貧村から逃れ、いい暮らしを求めてリマへやって来るが、人種差別と堅固なヒエラルヒーの壁を前にして希望を失ってしまう。しかし、その日の糧を得ねば生きてゆけない彼等は、タクシードライバーや日雇い・女中・路上の物売りになっていく。

先住民達の窮乏に喘ぐ姿は、大都会リマの随所で見られ、これが今日のリマを映す素顔の一面でもある。

<ラッキー!>

初回訪問時、フジモリ大統領の姉と懇意にしている日本人(知人のペルー人の知り合い)の方の計らいで、大統領官邸内を見学することができた。

知人と二人パスポートを持参し、金属探知機(空港内と同じもの)のゲートを潜り、ガイドに案内されて官邸内を見学した。初めに目に入ってきたものは、お召し車両(馬車)で傍に衛兵が立っている。

官邸内は豪華絢爛、スペインにある王宮を髣髴させるほどだ。大食堂には、黒光りした大きな長いテーブルと座り心地よさそうな椅子がたくさん並んでいる。閑議が開かれるのであろうか、閑僚達が足早に部屋へ向かう姿や、私服のSPが随所に立つて警戒に当たっている様子も見える。昼12時には官邸広場での衛兵交代儀式があり、私の直ぐ横を衛兵が行進していく様子は十分な迫力があり見応えがあった。隣接のマヨール広場からは沢山の見物人が官邸を取り囲み鉄柵越しにこちらを見ている。本来ならばその中の一人であったと思うが、邸内から見学できるとは思ってもみなかった。もう一度見学したいと思っても、フジモリさんは日本に隠遁しているし無理でしょうが、でも南米の国々では失脚、外国逃亡した大統領が、また大統領に就くとの話を聞くので、も領に返しかしたら……

2.クスコ（CUZCO）にて

私にとってインカ帝国の次にくる言葉を捜せば、それは帝国の首都クスコ（ケチュア語で「臍」を意味する）である。クスコは標高3326メートルのアンデス高地に在る。（11～12世紀ごろに街は築かれた。）

アクセスはリマ市から空路約1時間。リマ発の便は、高地気象なので天候が安定している時間を選んで飛行するため午前中に集中している。
＜郷に入っては郷に……＞

クスコに行く時、一番気懸かりだったのは高山病だ。リマの海拔154メートルから、一気に飛んで3326メートルの高地に移動してしまって大丈夫なのか。確かに急激な気圧低下に順応できず高山病に罹る人がいるので、クスコのキスキピア空港に到着した観光客は、ホテルに直行して十分に休養し、身体を高地に慣らしてから、午後に市内を観光するパターンになっている。着いた時は何ともないので、普段通りに行動してしまうと、2時間後に高山病の症状がでた人が居ると聞く、甘く見るのは禁物だ。

知人から高山病に罹らない良い薬があるので、これを必ず飲めと言われ服用した。薬効なのか全く症状は出なかった。薬の名は「DRANAMINE」（16ソル約5米ドル）。行かれる際には、是非リマで調達して服用されたら良い。

世界遺産「クスコ市街」の謳い文句は「インカ帝国の中心地として栄えた太陽の都」である。

とにかく、クスコは高地で空気が希薄だから、赤茶色の瓦で統一された建物の屋根や真っ白でスペイン風である建物の壁そしてインディオの民族衣装までもが、太陽の光を受けて鮮やかな彩りとなって映える。

＜黄金の魔力＞

スペイン人は血眼になって黄金郷を捜し求めたことはご存知の通り。

当時のクスコでコリカンチャ「太陽の神殿」と呼ばれたもっとも華麗な建物（現在はインカの石積み（礎石）の上にサント・ドミンゴ修道

院が建っている）は、外壁に掌の幅程の金の帯が張り付けられ、内装の内壁にも金・銀の薄板が張られ、神殿の中庭の中央には噴水があり、これにも黄金の覆いが被せられていたと伝えられている。そして外側の庭には「黄金庭園」があったとスペイン人が書き残している。クスコには帝国中から黄金が集まっていたのであろう。

スペイン人はこれ等の金・銀を掠奪し、延べ棒にして、本国に送ってしまった。そして、その後のスペイン植民支配下での過酷な労働と税の取立で、「スペインへ運ばれたのは銀ではなく、インディオたちの汗と血なのである」と17世紀にあるスペイン人が書き綴った事実は、この国の歴史を知る上で認識しておかねばならないであろう。

ところで、クスコに居ると未だ黄金が豊富にあり、容易に手に入るような錯覚に陥ってしまい、女房、姉、義母の土産にと金のペンダントをつい買ってしまった。果たして安い買い物だったのか…？

＜石の魅力＞

クスコはスペイン人の侵略で、繁栄を誇った当時の市街建物は悉く破壊され、今日ある建造物は、インカの石積み（礎石）の上にスペインの征服者が建てたものである。

インカの石積みは、積み重ねてある石と石の隙間は、剃刀の刃も入らないと言われ、精緻を極める素晴らしいものである。なかでも12角の石は、是非見てほしい。12の角を作って石組みにした不思議さと、奥深さを感じさせる石で、クスコの街で一番印象に残ったことはこの石であった。（場所はホテル・リベルタドールの近く）

私は、これらの精巧で重厚なインカの石積みを見ると、先住民族インディオは寡黙で几帳面な性格、また忍耐強く揺ぎない強固な意思を持っている人々と思う。数回の大地震でも、征服後のスペイン人が建造したものは崩壊したが、インカの石積みはビクともしなかった。

<イヨォ>

夕刻、知人とレストランに行く途中、偶々、通り掛ったガソリンスタンドでは、3人掛りでドラム缶を車の荷台に載せようとしていた。そのとき、「イヨォ」という言葉を発したのを聞いた。私は吃驚して、思わず3人の顔を良く見たが、3人とも日本人・日系人の顔付きではない、浅黒く日焼けしたインド人の顔である。ちょっと待ってくれ、「イヨォ」は重い物を持ち上げる時に発する日本人特有の掛け声ではないのか。何故インド人が???

今でもあの「イヨォ」の言葉は耳から離れない。

大昔、ベーリング海峡の海底が露出して陸続きだった時、人類はユーラシア大陸からアメリカ大陸へ渡った。インド人の身体的特徴はアジア人に見て取れるし、日本人のアイヌとアンデスのケチュア族は昔一緒に暮らしていたとも言われている。思わず発する「イヨォ」の掛け声にアジア起源説の有力な弁証があるとするならば、これは面白いことになる。今後検証したら学術的価値が出てくるのかなと思った。

<アンデスの味覚>

海外旅行の折、結構珍しい食べ物に挑戦する方である。アンデス地方では多くの家庭で飼育していて昔から食されている「クイ」（日本名は「天竺ネズミ」）という小動物料理がある。宿泊したホテルのレストランで、伝統的な「クイ料理」に挑戦した。

料理法は毛を筆った後に内臓を取ってそこに塩・香辛料を詰め込んで、体に油を塗ってこんがり焼き上げる。姿形はそのまま大きなお皿にドーンと運ばれてきた。いよいよネズミに挑戦と心を鎮めて、一口入れた瞬間、「いやあ参ったな一臭う！」と思わず顔を顰めた。食べる前にネズミのイメージを浮べないようにと努めていたが、どうしても、ピンクの鼻をくんくんして徘徊するあの姿が出てきてしまった。不思議なもので、頭の中でその姿を描くと口の中にその臭いを誘うのだろうか。誤解を生じないた

めに言うが、決してドブ臭くはない。但し、若干獣臭い味がするのは確かである。どちらかといえば鶏肉のようだが。もう結構と一口で私は箸を置いてしまったが、知人は、母親の焼いた「クイ」はもっと旨かったと昔の味を懐かしみながら、盛んに食べていた。

後で知ったが「クイ」はモルモットである。明治15年ごろ、モルモットは「遠い天竺（インド）より海を越えて渡来したネズミに似た動物」ということで和名にネズミを付けてしまったのだ。他の名前を付けていたらもう少し食べられたかもしれない。料金は結構高価であったと記憶している。一口であの値段は口惜しいと思ったが、インカ帝国の国ペルー大好き人間の私は、インカのことを知る上で目・耳だけではなく、口からの吸収も必要。そのためには、金銭に換えがたい得がたい経験をしたと自分自身納得させた。（ちょっと無理かな）

3. マチュピチュ (MACHU PICCHU) にて

ペルーに行って、マチュピチュに行かなかったとしたら、何のためにペルーに行ったのと、いわれてしまうのではないだろうか。以前、あるテレビ局の「世界遺産」という番組で「世界遺産の中で一番行きたいところは？」の視聴者8000通のアンケート結果は、2位のエジプトのピラミッドに2倍以上の差を付けて、マチュピチュが断然トップであったと聞く。

その抜群に人気のあるマチュピチュ遺跡は、マチュピチュ（老いた峰）標高3070メートルとワイナピチュ（若い峰）2720メートルの二つ山の鞍部標高2350メートルに築かれた。（いつ築かれたかは未だに謎）

<空中都市>

「多くの謎に包まれた“空中都市”」と言われるマチュピチュ。小さい時、この“空中都市”の言葉を耳にしたことがあり、幼心で世界には空に浮かんでいる都があるのかと思ったことがあった。切立った山の頂上に都市を造ったの

で、山裾からは見えないことから「空中都市」
ばれるだけなのだが。

アクセスはクスコのサンペドロ駅から列車に
乗って、マチュピチュ近郊のアグアス・カリ
エンテス駅下車(所要約3時間半)、そこから
バスで九十九折の道路を約30分登って、遺
跡到着となる。

<三つの「感」>

遺跡の全景を目の当たりすると、思わず息
をのみ、目は風景に釘付けになるとか、立ち
尽くして暫く動けなくなってしまうとか、余
りの素晴らしさに放心状態とか、今風の若者
の表現ならば「スグエー」とか、表現は違
っても、何しろ「感動もの」である。

その感動の次に来るのは、「こんな高い処
にこれ程のものをよく造ったものだ…」と
「感心しきり」となる。(何故これほどまでの
高地に造ったは未だに解明されていない)

そして、次には、険しい山々・廃墟と化し
た幻の要塞都市・谷底を流れるウルバンバ河
の眺めともなれば、もうシュチュエーション
は最高の域に達し、クスコのレストランで聞
いたあの「コンドルは飛んでいく」フォルク
ローレの調べが山々にこだましてゆっくりと
流れていく様子について「感傷的」になってし
まう。

マチュピチュ遺跡の詳細はガイドブック・
世界遺産関連本にゆずることにしよう。

ところで、マチュピチュの遺跡は地盤が1
ヶ月に約1センチずれ続けており、遺跡崩壊
の危機にあると、日本学術調査隊の報告があ
る。唯一、スペイン人の破壊から免れたイン
カ帝国の都市も自然現象によって将来は崩壊
してしまうのであろうか……

以上2回に亘る南米の国ペルーの訪問
であったが、殆どが初回訪問時のことにな
ってしまった。他にプーノ・ナスカ・
カハマルカ・トルヒーヨ、又隣国のチリ・
アルゼンチン・ブラジルを巡った。

ともかく、ペルーは私にとって大変特
異のところに映り、興味が尽きない国で

ある。今回は感じたままに自分なりに記
し、「南の会」会員としての「生活一般」
の情報提供が殆ど出来なかったことを心
苦しく感じている。

来年はもう少し長く行く予定であり、機
会があったらロングステイに役立つ詳細
情報を提供したい。

メーリングリスト

私、酒匂はMLでのサロン、懇親会伝達、返
信などは賛成です。特に関東支部のサロン、
懇親会は全国の会員の皆さんが関東地区に
用事のあるときは立ち寄って頂きたいから
です。

個人メールは出来るだけ個々にして頂き
たいですが、個人メールでも他の会員にも
共有の情報と思われる方はMLに送信され
ます。

私事ですが、私のPCはどういう訳か新規
登録が出来なくて困っております。(販売
店や友人に聞いても分かりません。)全て出
来ないのであれば良いのですが、1割くら
いは登録出来ます。ところが受信した物に
対してはメールアドレスは返信で
登録されます??? という事でMLを私
信で利用する事になります。この点ご容赦
下さい。

しかし関係ないメールを一々削除するの
は煩わしいと言う人が、ある程度居る事も
事実です。

先回の理事会でも色々な意見が出ていま
す。情報の共有化、仲間の親睦も大切です。
ML上での仲間(懐かしい方のメールを見る
とホッとします。)の安否を知る事も貴重な
情報です。

MLについても、もう少し研究すると共に
MLの今後のあり方についても。会報秋季号
の添付で皆様の意識調査をする事にしてお
ります。

意識調査の回答により、今後の運営も左
右されますので、皆様のご協力をお願いま
す

私は昨年11月20日に川上さんを頼りセブの状況を10日間教えてもらい、再度12月8日から1月15日まで40日近くをmidtownホテルにロングステイしセブでの生活方法や周りの治安状況を調べさて次はバリかペナンに行き住み易い所をまた探そうと東京に戻り計画を立てたのですが、結局また2月10日にセブに戻りmidtownホテル住まいを始めてしまいました。約4週間のホテル住まいの後、鈴木さん川上さん山口さんの入っているayalacond1bedroomを衝動借りてしまい、今はのんびりと南国生活を満喫しています。

私の感じたセブの良いところ悪いところを以降に紹介して行きますいろいろ反対の意見もあると思われませんが、あくまでも鶴岡の私見と言うことでお許し願います。

まずセブの良いところから行きましょう。一番は天候気候が良い、気温も25度から35度くらいで一年中夏です。雨も少なく風も強く吹くこともなく台風のこと日本のTVで知る位です。今8月1日ですが気温も30度以下の感じで湿度も高くなくとても過ごしやすく足腰の神経痛が出ることもありません。私の部屋の窓からセブの港やマクタン島遠くにはボホール島もはっきり見え何もしないで景色を見ているだけでも十分です。



次は食べ物についてですが、此処では日本にいたとき(と言っても東京都足立区ですが)よりも選択肢が多いです。私は今まで独身でしたから外食が多く自分では麺類ぐらいしか料理は出来ません。セブでは日本レストランはもちろん、中華、韓国、イタリア、その他洋食、ステーキ、そしてフィリピンレストランと豊富で毎日自分の好みで選べ食べ物で飽きることはまず無いでしょう。その他starbucksコーヒーやbossコーヒー屋も多数あり、のんびりと時間を過ごす事が出来ます。

気になる金額ですが、全てが日本の半額か3分の1と思ってもらえば安さが分かると思われれます。宮崎理事が南国の会報にお書きになった和食レストラン「夢や」は、観光書籍歩き方や案内書には紹介されていませんが、セブではもっともおいしい店の一つです、南国の会員には特別の計らいもして戴いています。

次に街の状態ですが、この街は、東京の大田区や荒川区の30年ぐらい前の町並みを想像していただければ感じが分かると思われれます。大きな建物は少なく1-2階建てのバラックで人の数だけはたくさん居る、少し歩くのは怖いような、でも大きなモールayalacenterや、smマーケットへ行くと店は綺麗、品物豊富、値段は安いと3拍子も4拍子そろっています。店員は日本人には丁寧で、買い物でいやな思いをすることはまず無いでしょう。

言葉もセブの人は英語を話すことが出来ずから日本人のよく使う単語を並べるだけの表現でも理解してもらえます。要するにカタカナ英語でも結構通じると言うことです。日本人にとってこんなに便利なことは有りません。もちろん英会話が出来るとは越したことはありません、私も今特訓中ですが右の耳から入り左の耳からすぐ出てしまい毎日が反省の日々です。外出時は電子辞書を持って出かけ

ればもうほとんど大丈夫です。

お金の単位はペソで現在はほとんど2円が1ペソです。このレートは昨年11月来たときから今までの約10ヶ月は変わらないのですが約6年前は3,5円1ペソと比べると円の価値が高くなっているのが分かります。ペソでの預金は利息が高く魅力的ですが円に対してペソの下落を考えると円のままに持っていた方が良いと言う気がします。海外で暮らすには為替に敏感になる事が必要のようです。ロングステイをするに当たり海外では掃除、思いますが、此処セブでは洗濯は1キログラム当たり35-40ペソ(70-80円)でしてくれプレスは別料金です、部屋の掃除はメイドを頼むのですが約2時間で150-200ペソ(300-400円)で掃除機かけ、モップ床拭きシート取り替えトイレバスの清掃と月に3回ぐらい頼んでいます。料理の方はメイドを雇うと月住み込みで3000-4000ペソと聞いています。

家で料理しなくともレストランがいっぱいあり安くておいしい世界中の料理を楽しむことができます。日常私が感じた事は日本での生活を何ら変更することなく此処では生活でき、ビール大好き人間の私にとってセブのビールは日本の4分の1で買うことが出来レストランで飲んでもさほど高くないので経済的には大助かりです。

スポーツに関してですが、セブの市内にはゴルフ場もあり有名なコースだとも聞いていますが、私はゴルフをしないためによく判りません。ただ少し他の国よりプレイ料金が高いと言っている人も居ました。が、日本よりずっと安そうです。セブの周りのダイビングスポットへ会員の今野さん岡野さんと何度も潜りに行き鮫やバラクーダを見ることもでき竜宮城のような世界を楽しんでいます。今野さん岡野さんは300本以上のベテランで私は安心して潜ることが出来感謝感激です。今野さんは10月にまた見えると言うことなのでいまからのしみにしています。その他

のスポーツとしてはボーリングとビリヤードが盛んです、この金額がまた驚きの値段で100ペソ1時間ぐらいは遊べます。

その他の娯楽施設としてはモールには映画館がありアメリカと同時封切りです。立体音響ドルビーサラウンドで、指定席もあり一般席70ペソ(140円)という信じられない値段です。英語のママですが、スパイダーマンやデアアフターズモローを見るのには何ら障害は無いと思われま

す。此処までのことではセブはロングステイに最適だと思われま

すが、悪いこともあります。まず物価が安いと言うことは国民の購買力がない、貧乏人が多い、ストリートチルドレンもいる、騙しだまされることもある、日本でもそうだが、此処では暗いところの一人歩きは絶対出来ない。日本人はお金を一杯持っていると思われているからなおさらです。また、60歳以上の日本人(男)は宝くじの当たり券と思われていることです。この意味分かりますか?衛生概念が低く汚れたところ、汚いところが至るところにあるコロ地区に行ってみると此処もセブかと思われる場所が一杯だ。

成田から4時間半でセブマクタンAIRPORTに到着そこから我が家まで200ペソ30分で部屋に潜り込むともう此処は天国です。帰りたくなーい。



ラブラブ大魔王

東海支部マレーシア体験ツアー

愛知県在住 会員No. 749 山本義典

ペナン島見聞記

9/1、名古屋空港を発った我々東海支部の10名は、タイ国バンコクより合流の1名を加え総勢11名、LSの実際を見極めの旅に向かった。ペナン空港で我々を出迎えてくれたのは、現地のエージェント、トロピカルリゾートライフスタイル社の制服（アロハシャツ）の似合うチャイニーズ系マレーシア人のコウさん、流暢な日本語にホッとす。案内され到着したホテルは、エバーグリーンホテル、ペナン島北東部、マレーシア第2の都市ジョージタウンの5つ星ホテル。50リンギ札をチップ（枕銭）に必要な小額紙幣にフロントで両替し、すぐ就寝。

翌9/2はペナン島の不動産事情、医療事情の視察をメインにいくつかの施設を回る。とはいえ、トロピカル代表の石原さんの案内で専用車での気軽な移動である。ホテルの在るガーニー地区よりやや北のタンジュンブンガ地区に移動。この地区には長期滞在者の住むコンドミニアムが多い。建築ラッシュの真っ只中であり、あちこちで埋め立て、建設が行われていた。短期滞在施設としてパラダイスホテル、コプトンオーキッドホテルなどを視察する。自炊も可能な部屋も用意されており、2～3ヶ月程度の滞在も充分可能。殊にオーキッドは日本人の女性スタッフが常駐しており、安心して利用できる。ロビーも明るく、部屋もエレベーターも綺麗で好感が持てた。医療事情の視察では私立病院としてはペナン第2位のローガンライスペシャルスツセンターの内部を案内していただいた。病室は広くて綺麗、病院というよりホテルの感覚。それなりの経済的負担と引き換えに最高の医療サービスが受けられる。CT、MRIなど最新医療技術の水準は日本のそれと変わらない。

夜は、ペナン支部の皆様とパラダイスホテルのレストランにて歓談の機会を持ちました。

9/3、ペナン支部長・木村様のご厚意で、タンジュンブンガの私邸を拝見させていただきました。ゲスト11人+石原さん+木村様夫妻

で、リビングは賑やかに、歓談の時間を持つことができました。日本の水準からすれば、かなりゆったりとしたリビングスペースに、数々の珍しい家具や置物が所狭し、と置かれ、訊ねると、ご夫妻は頻繁に近隣地域に足を運び、これらの家具などもその際購入したもの、とのこと。特にお気に入りは、タイ国ハジャイの町で、この地はマレーシア国境と地続きで、ペナンから車で数時間内に訪問できる、野菜、米、土産物など、びっくりの値段で手に入るとのこと。タイ国では質の良いジャポニカ米（あきたこまち）が栽培されており、ハジャイの市場で簡単に手に入る。立派な象の木彫りなども安い（円換算で数百円程度）。タイ国チェンマイ通で知られる東海支部長・横井さんより、あきたこまちに、タイ国北部で採れる山岳米をブレンドするとこれが、殊のほか美味しい、との発言もあり、大いに盛り上がる。

ペナンは物価も安く治安も比較的良いとされ、LSの適地となっていますが、人間とは贅沢なもので、どんなに良い環境であっても飽きる、という現象は避けられません。それは、ご馳走も毎日続けば、たまにはあっさりした茶漬けが恋しくなるようなものかも知れません。ペナンは端から端まで車で40分もあれば着いてしまうような東西15キロの小さな島ですので、長く住んでいると一種の閉塞感が生じてくる、ということもあり得るでしょう。木村様のお話から、ペナンはそれ自体素晴らしい楽園であるが、むしろ、いろいろな所に出かけるベースキャンプとして最適な場所なのではないか、という印象を受けました。

9/4朝、ホテルを発ち、ペナン大橋より本土（半島マレーシア）に渡り、さらに新しく開通した高速道路に乗り、キャメロン高原を目指します。道路から見える景色はどこまで行っても油ヤシのジャングル、単調な景色が続きます。華人の町、イポーを抜けると景色は山岳地帯の様相に変わり、気温も徐々に下がってきます。

キャメロン高原道中記

さて、キャメロン高原は北よりプリンチャン、タナ・ラータ、リングレット、3つの小さな街から構成される。往路は北側のプリンチャンを通過し、ホテルの在るタナ・ラータに入る。帰路はホテルよりリングレットを抜け、クアラ・ランプール（KL）に向かう予定。帰路は旧道（悪路）のため、車はスゴク揺れる、とガイドのコウさんにおどされる。3つの街は、それぞれ片側1車線の街道の両側にホテル、レストラン、土産物屋が並ぶが、一旦街道を外れると寂しい場所、との説明であった。



蝶園によろこそ（入場料は3リンギ）

途中、キャメロン観光の目玉、バタフライ・ファーム（蝶園）に立ち寄る。巨大な看板に蝶の絵と“RAMA-RAMA”（マレー語の蝶）。日本語の「ちょうちょう」同様、同じ韻を繰り返すことが可笑しかった。ここで飼育している蝶、カブトムシ、サソリ、タランチュラなどの生物は全て、オラン・アスリ（原マレー人）の持ち込んだものだという。彼らは、キャメロンのジャングルに住み、独自の文化を守ってきた。毒を塗った吹き矢で獲物を仕留め、食料にする。農耕を行わないので定住はせず、獲物がなくなれば新天地に移動する。従って、マレーシア政府も彼らの実数を把握できていず、その実態もほとんど分かっていないという。

蝶園近辺の街道沿いにはいくつかの観光スポットがある。ストロベリー・ファーム（苺園）、ローズ・ガーデン（薔薇園）、ティー・ファクトリー（茶の工場）、パサール（市場）など。いず

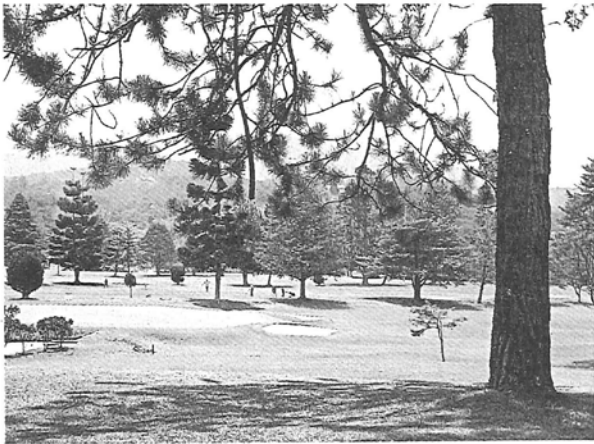
れも、高原ならではの、の施設で、市場では地元
の農民が高原野菜や苺、花などの特産物を露店
で販売、結構賑わっていた。

プリンチャンに着いたころ、雨が降り始める。なかなか、止みそうにない。標高1500mのキャメロン高原では天候は不安定で、午後はこうした雨が降る事が多い。しかし、1～2時間もすれば降り止む、とのこと。街道沿いの小さな銀行や診療所などを見て回る。雨の所為か、人通りは少ない。銀行の外に設置のATMは、貼付のマークから私の所持しているキャッシュカードが使いそうだと判断できた。診療所は薄暗く、人の気配がない。簡単な病気や怪我なら、ここで直せるが、緊急手術が必要なケースなどではイポーまで搬送するそうである。

観光客の参拝の多いといわれるサン・ポ寺院（三寶萬佛寺）に向かう。この寺はプリンチャンの丘の上に建ち、チャイニーズ系のマレーシア人の信仰を集めている。丘を上る坂の途中、おそらく修行中の僧であろうか、数歩上る毎に地べたに伏せて拝礼をしている姿が見えた。坂を登りきった先に数軒の土産物を売る露店、その奥がサン・ポ寺院。いつしか雨は止んでいた。日本語で呼び込む露店の商品は、玩具や野菜など、余りお寺とは関連のないものが多い。寺の境内に入る。ここでは、日本のように拝観料を要求されることはないが、寺の維持の為、幾ばくかの寄付（賽銭）は必要かと思う。仏殿正面を守る一対の狛犬は雌雄ペアとのこと、なるほど、向かって左は雌で足許に児を従え、一方、向かって右の雄は玉（ギョク）を携えていた。仏殿に焚かれた線香の芯の色はチャイニーズ系の好む赤である。黄金色の仏像が多く並んだその奥にご本尊の姿が見えた。想像していた以上に柔和な表情をされていた。本殿を出て、プリンチャンの街を境内から見下ろす。高原の緑の中に茶色の建物が点在している。静かだ。のどかな風景が広がっている。

再び車に乗り込み、タナ・ラータに向かう。途中、キャメロン唯一のゴルフコースを横目に南下。コウさんによれば、マレーシアのゴルフ場の

キャディーは全て男性、とのこと。何故か？イスラム教を国教とするマレーシアにおいて、男女の交際は殊のほか厳しく、男性のゴルファーが女性（キャディー）の身体の一部（それが腕であろうと、髪であろうと）に触れるようなことは、宗教上の戒律に照らし、絶対に許されない。そうなった場合、宗教裁判を回避するには、男性がイスラム教に改宗し、その女性と婚姻するしかない、これがマレーシアに女性のキャディーが存在しない理由、との説明であった。



のびのびプレーできるキャメロンのコース

ゴルフ場を見下ろす眺望のメルリン・イン・リゾート、そして伝説のホテル、オールド・スモークハウスを抜け、15分ほどで、タナ・ラータに到着。宿泊予定のホテルは山荘風の落ち着いた佇まい。敷地内には、ホテル以外に数棟の長期滞在者のためのアパートも建っており、空室もいくつかある様子(For Rentの掲示)。こじんまりしたロビーにはマレーシアの国旗の他、多くの旗（おそらくマレーシアの各州の旗と思われる）が飾られている。フロントで鍵を受け取り部屋へ。鍵は（ペナンのホテルと違い）カード・キータイプではなく、重く、ごついキー。エアコンのスイッチは見当たらない。確かにキャメロン高原は熱帯に在るとは思えない爽やかな気候、クーラーの必要は感じない。しかし、ガイドのコウさんの「ホテルにエアコンは有りません、エアコンのコントロールスイッチも有りません」との言葉の本当の意味をこの時、私はまだ理解していなかった。バスルームに入る。トイレ、洗面が一体のタイプ。多少狭

い感じがする。お湯を出す。ぬるい。そういえば誰かが、ここキャメロンではAM8時までにお湯を確保しないとダメだ、と言っていたのを思い出した。きっと、AM8時を過ぎると貯湯槽がカラになってしまうのだろう。顔拭きのタオル、バスタオルなど清潔さが無い。全体に薄汚れ、使う気がしない。日本から持参のタオルに取り替える。清潔さに関し神経質すぎる日本人にはこのホテルは適していないかもしれない。「マイペンライ」(大丈夫)が口癖の横井支部長のように、細かなことは気にしないこと。旅行者としてならともかく、生活者として東南アジアに向き合うには頭をアジアモードに切り替えねば、と思えた。後で伝え聞いたところでは、メンバーの1人が部屋にチェックインの直後、部屋のテーブルに蟻が沢山いた為、フロントに苦情を申し立て、部屋をチェンジしてもらった、とのこと。私以外にも、典型的日本人はやはりいた。

夕食はプリンチャンのスチームボート屋での食事。キャメロンにはスチームボート屋の数が多し。しゃぶしゃぶ風海鮮鍋をフーフーいいながら食べる。美味い。夕食の後、プリンチャン名物のナイトマーケット（夜店）に出動。Tシャツ、果物、菓子など、余り安いので次々買ってしまふ。地元の芋（キャメロン芋）を蒸かして売っていたが、これがとてもおいしい。大満足でホテルに戻る。

翌朝（9/5）、余りの寒さに飛び起きる。時計を見るとまだ4時。「エアコンのコントロールスイッチも有りません」とのガイドの言葉の意味がやっと分かった。自然の冷房なので調節が効かないのだ。一枚余分に羽織り、震えながら眠る。AM8時前に熱いお湯につかり、やっと目が覚める。食堂に向かう。朝食はビュッフェスタイル。定番のナシ・レマツ（マレーの朝食）に手を伸ばす。ペナンのナシ・レマツがたいそう美味しかったので、食べてみたかったのだ。ところが、ナシ・レマツに添えるサンバル・ソースが大変に辛い。もともと辛いソースではあるが、ここのは別格。でも、ひよっとし

たら、この辛さが普通なのかも？とも思える。気が付けば、食堂の開いた窓から小鳥たちが入ってきてそのあたりを闊歩し、再び大空へ帰ってゆく。すこぶるアジア的風景。辛さを忘れ、感動してしまう。

本日と翌日は終日自由行動。ゴルフを期待してきたメンバーは早速ゴルフコースへ向かう。ゴルフの経験の無い私はどうスケジュールを立てようか。結局、ストロベリー・ファーム（苺園）→ ローズ・ガーデン（薔薇園）→ ティー・ファクトリー（茶の工場）→ パサール（市場）のツアーに参加することにした。ツアーの車中、シンガポール人の家族連れと仲良くなった。若いお父さんはフレンドリーな方でよく喋る。話の内容の半分ほどしか理解できなかったが、楽しくツアーが続けられた。英語がもう少し達者なら、旅の楽しさも倍加するのに、と残念である。ツアーの後、タナ・ラータの理髪店に入る。インド系の主人が刈ってくれる。料金は6リング（円換算180円）。夕食はメンバー全員で、タナ・ラータの中華レストランでいただく。余り奇抜なもの、怖くて注文できそうにない。この店は、メニューが日本語で書かれているから比較的安心である。青菜の乗ったラーメンを注文する。結構いける味であった。ホテルへ戻る途中、サンデーナイトマーケットでフルーツを買う。ライチに似た味のフルーツ、両手一杯で2リング（円換算60円）。



ドラえもんと折り紙とジャングルの子ら

翌日（9/6）、ゴルフ行き以外のメンバーでジャングルトレッキングツアーを申し込む。ジ

ャングルまで我々を四輪駆動車で運んでくれる、という。なんだかワクワクしてくる。ガイド兼運転手は自称、父がチャイニーズ系、母がインド系、見掛けは純粹マレー系（顔が真っ黒）の男性。まるでマレーシアの人種分布を見るようだ。ジャングルの手前で車を降り、ジャングルに深く分け入っていく。足許はぬかるんでいて、苦勞しながら進む。食虫植物のウツボカズラなど珍しい生物を観察した後、車に戻り、更にジャングルの奥地へと進む。オラン・アスリの村へ連れて行ってくれるという。大変な悪路で、何度も天井に頭を打つ。途中、ゴーゴーと流れの急な川を渡河し、数時間かけて村に到着。村人は私たちのために吹き矢の実演をしてみせてくれ、私たちは、オラン・アスリの子供たちに日本の折り紙を教えてあげた。子供たちは、とても純粹で目がきらきら輝いていた。

9/7、いよいよ最終日。ホテルを発ち、KLに向かう。予め、悪路だと教えられていた帰路も、前日のツアーの悪路に比べれば物の数ではない。KL市内観光の後、マレー料理店で夕食、そしてマレーの民族舞踊の観賞。舞踊を見ているうちに突然こみ上げてくるものがあり、ひどく感動してしまった。その後、KLIA（空港）に向かう途中、振り返った私の目に映ったKLタワーはマレーシア国旗と同じ4色のイルミネーション、何故か、滲んで見えました。

最後に、木村様、石原様を始めペナン支部の皆様、ツアー中お世話を戴き有難うございました。

（参加者名簿）

No. 487	横井 保夫	半田市
No. 543	清水 重一、佐代子	名古屋市
No. 549	松本 美代子	西枇杷島町
No. 584	岸 彰介、ケイ子	各務原市
No. 600	横山 義治	バンコク
No. 679	中山 初代	多治見市
No. 749	山本 義典	三好町
No. 793	北島 長一、栄子	桑名市

（敬称略、会員番号順）

メコン遡行

栃木県在住 会員 No. 373 水谷 郷

☆ 始めに

昨年1月半ば、ロングステイしているチェンマイから、ラオスに1週間の旅をした。

まず、空路、首都ビエンチャンに飛び、2日間、それから、人口5万の第2の都市ルアンパパンにも空路を選んで2日滞在し、その帰途は、ルアンパパンからフェーサイまで大河メコンを船で遡り、フェーサイからは、対岸のタイ領チェンコンへ渡り、チェンライからチェンマイへ、というコースである。

この旅の圧巻はメコンを遡行するという快挙であった。そんなもの快挙でも何でもないじゃん、と思われる方もいらっしゃるかも知れないが、2日間、船端の低い小さな舟、外人ばかりの中に混じり、茶色に濁った大河に浮かんで揺られているということは、なかなか普通じゃ経験できない珍しい経験でありました。

ラオスは、周辺をベトナム、カンボジャ、タイ、中国、ミャンマーに囲まれた海の無い国で、タイとの国境の一部は大河メコン河になっている。20世紀初頭フランスによって統治されたり、その後、長い内戦の期間を経て1974年、人民民主主義国として誕生した。そのような事情から一歩足を踏み入ると何となく変わった雰囲気漂っている。

ビエンチャンにもルアンパパンにも、市内に1箇所公営マーケット（朝市）があって、ここは、衣類、雑貨、食料などの店が密集して活気に満ちているが、それ以外のストリートは閑散としているし、道路、下水などインフラ関係の整備はまだまだのようであった。国は貧しそうだが、行き逢った人々、ソントウのドライバー、商店やホテル、ゲストハウスの従業員など皆穏やかで、人の良さそうなのが多かった。

人民民主共和制という政治体制の詳しいことは分からないが、乞食や、子供の物乞い、押し売りが居ない。貧しくともその地域に合った生活をゆっくり楽しんでる、という感じがした。

さて、紙数が制限されているので首都ビエンチャンと第2の都市ルアンパパンの細かい印象は省略させて頂き快挙「メコン遡行」を紹介したい。

☆ メコン遡行

ルアンパパンからフェーサイまで、メコン河を遡る1泊2日の船旅。船賃は、11万Kip、円に換算すると1400円ぐらいである。

初め1泊2日と言うのは、舟の中で寝るのかと思ってどんな船なのか少々不安であったが、これは調べたら、途中の部落で下船してゲストハウスに別料金で泊まるということが分かった。港のオフィスが、8時に開くのを待ってチケットを買い乗船する。

メコンは茶色の濁流である。港と云っても桟橋などの設備は無く、砂浜の岸に遊覧船ほどの大きさの船が数艘横付けされている。

乗船は岸の砂浜から船端に差し渡された30センチ幅ほどの板を渡るのである。バランスを失ったら河中に転落する。重いリュックなど背負った女性など危なっかしい。

座席は左右の船端に2席ずつで中央が通路である。前方にある座席の右船端にかみさんが座り、その隣は、欧米系の大きな青年。通路を挟んだ左の内側に私が座った。

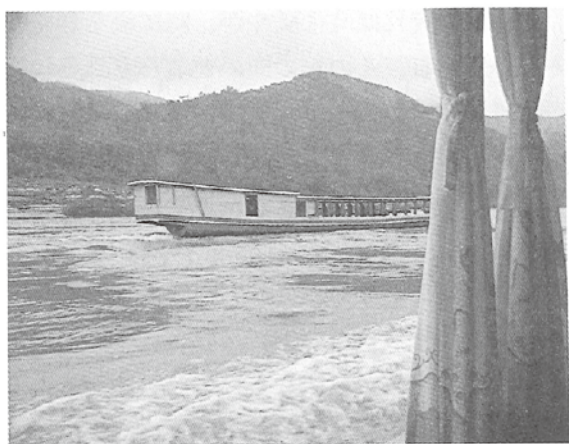
そろそろと乗客がやって来て、屋根の上にも座席の隅にも荷物が押し込まれる。荷物は、家具類・食料品など雑多である。

8時出航になっていたが、なかなかその気配が無い。チケットの再チェックが始まる。頭数が合わないようだ。若いねーちゃんが2人、行く先間違えて乗っていたらしい。キャツ、キャツ言いながら下船した。

それでも、なかなか出航にならず、1時間半遅れて9時半、満員になった乗客と、これ以上は無理と思われるほど、屋根上まで押し上げてぎゅうぎゅう詰めに荷物を積んだ船はやっと岸を離れた。

船は、全長30メートルぐらい、前部の1段高いところが運転席で、次の客席が全部で50席ぐらい。客席の背後にコーヒー、ビスケットなどのスナックを販売する小さなカウンターがあり、その後ろがトイレで、その背後に剥き出しの大馬力トラック・エンジンがあつて轟音を上げている。

最後尾は船員の家族居住区のように隅に毛布



が畳んであり、アンペラの上でトランプなどやっている若者がいる。

屋根を支える支柱にカーテンが下がっているだけだから、川風はもろに吹き込むし、飛沫も飛び込む。寒い。前日、タムティン洞窟を訪れた同じ航路をたどるので、そのとき寒かった経験から持っている衣類は全部着込んできたし、マスクをはめ、風呂敷を頭から被り、バスタオルで膝を包む。それでも寒い。隣のかみさんの横に席を占めた白人の大きな青年は、半ズボン、半袖シャツである。寒くないか？ と聞いたら寒い、と笑っている。彼の毛深い膝の毛を指差して、これがあるから暖かいんだろう、などと冗談を言ってやる。

この青年とは、2日間の同行で親しくなった。オーストラリア人だが今ロンドンにいる。7ヶ月の予定で世界一周の旅に出ている。ブリスベンの大学で建築学を学び大学を出たら、学んだ水利設計の仕事をオーストラリアで始めたい、今28歳、旅行から帰ったら30歳のイタリア人女性と結婚すると言うことであつた。欧米人には、こういう逞しい青年をときどき見かける。

2時間ほど走ると雲が薄れ、少し気温も上がってきたようで楽になってきた。

河幅は、3~400メートルもあろうか、大きな貨物船、観光船、漁船、スピードボート、スローボートと、いろいろな船が行き交う。

途中、3カ所で川岸の部落の砂浜に寄り、荷を下ろし数名の乗客が下りる。すこしずつ隙間が広がり窮屈感が減ってくる。

昼ごろになって空も晴れてきて気温も上がり楽になり、周辺の景色を楽しむ余裕が出来てきた。

昼食は、持参したカウニャウ（もち米）のお握りと売店のコーヒー、即席ラーメンですます。乗客の白人もサンドウィッチやコーヒーぐらいですましているようだ。

兩岸の山がせまって川幅が狭まったところは、流れはかなり急である。川面には点点と岩礁が顔を出している。波がざわめいている川面の下には岩礁が隠れているのであろう。

このような危険な箇所では、すれ違う船を待ったため、流れが弱い淀みに船を入れ、エンジンをストップして対向船をやりすごす。

動き出すと岩礁を探る為か、竹の棒で水深をはかりつつ徐行したりする。水は茶色に濁っていて底は見えないのである。雨季になり増水すると5~6メートルも水面が上昇すると言う。

船頭2人は30歳代、260キロメートルの航路上の岩礁を熟知してなくては、乗客を安全に運ぶ仕事にはならないであろう。操船を交代しながら、きびきびと仕事をこなす船を操るベテランの仕事振り。信頼できそうだ。

出発から7時間ほど経過して午後4時を過ぎると太陽は兩岸の高い山に隠れて急に川風が冷たくなる。

☆スローボート

5時半過ぎ、夕闇が漂い始めたころ、左岸の遠くに部落が見えてきた。今夜の宿泊地パクベンである。接岸。ここも棧橋は無く狭い砂地に渡された板を渡って岸に下り、目の前の急な砂の斜面をリュックを肩によろけながら上がり、更に坂道を息をはずませながら歩いて、ともかく、部落の入り口にある一番立派な、ゲストハウスに宿を取った。宿代500パーツ(1500円)。

坂道を上がってゆく奥の方にも安くて良いゲストハウスがあるのか、重いリュックを担いで行く乗客も居る。

夕食は、ゲストハウスを出て部落の奥の方を探検に行き、1軒のレストランに入ったら、客はすべて同船者であった。

翌朝、出航は8時である。まだ薄暗い7時ごろに起き出して向かいのレストランをのぞくと、同船者で、我が家の他にたった1人の日本人である青年がいる。一緒に食事をしながら聞いてみると、今日、彼は、ここからフェーサイーまでスピードボートにするという。

ルアンパパンとフェーサイ間はスピードボートの所要時間6時間だそうだ。既に半分は来ているから、ここからは、3時間ぐらいでフェーサイに着くだろう。

スピードボートというのは、日本で言うモーターボートだが、乗客4～5人。ヘルメットを被り狭いボート上に剥き出しに正面を向いて座っている。轟音と凄い飛沫を上げて水面をすっ飛んで行く。風圧と、水面を叩くボートの衝撃に耐えねばならない。トイレもままにならないし、酔うらしい。定めし寒かろう。そして、事故も起きて死人も出たことがあるという。誰に聞いても「止したほうがいい」と勧めない。

このスピードボートに対し、我々の乗った1泊2日の旅をする船はスローボートと言うのである。

今朝も曇り空、まだ薄暗い道路を、奥の方のゲストハウスに泊まっていた乗客が坂道を下ってぞくぞくと船に向かう。指定席でないから早く乗船して座席を確保するためらしい。座席は、前半分は片側2席のクッション付き、後半分は簡易チェアのがたがた動く奴が並べられてある。出発した昨日は、我々は早く乗船したので前の方に座れた。今日は遅くなったから、良いシートは駄目だ。うしろの簡易チェアでいいや、と諦めて人より遅れてゲストハウスを出たら、ポーターがいて船まで荷物を運んでくれる。20パーツだった。

出航8時半、昨日ほどは手間取らない。寒さは、昨日と同じだ。風呂敷被って、バスタオル

を膝に巻く。ロンドンの青年は、今日は、どこで手に入れたのかジャンパーを着て毛糸の帽子を被り「暖かい」とニコニコしている。でも、ショートパンツは昨日と変わらない。

乗客は、昨日出発の時は満員であったが、今日は、かなり減って後方の簡易チェアの席は空席もあるし、風当たりは前方ほどではなく却って楽である。寒さは昼近くなって和らいだ。

メコンの流れは時に緩やか、時に渦を巻く急流、奇岩怪石、その岩の間のところどころに白く綺麗な砂浜がある。水流の関係で砂が堆積する場所ができるようだ。その砂浜に野菜を栽培している個所がある。きちんと並んで芽を出している黄緑が美しい。(肥料気の無い真っ白な砂地に勢いよく育つ野菜もあるらしい)

何も無い真っ白な砂浜に放牧されている数頭の牛(草が無いから所在なげにじーっと寝たり立ったりしている)。

兩岸の山々は、深い緑のジャングルに覆われている。ときどき現れる数軒の部落、岸の笹舟、茶色の流れで洗濯している娘さん、汚れた河水の中で泳ぎ戯れている子供たち、手を振ると白い歯を見せて応えてくれる。川岸の岩の合間などに魚取りの仕掛け網が見えたり、投網で漁労中の姿。手着かすの自然が連なる辺鄙なこんな所にも人間の生活がある。

ときどき、すれ違う貨物船、これは、かなり大きい。力強いエンジンの音を轟かせながらゆっくりとすれ違っていく。メコンは、タイ、ラオス、ミャンマーなど沿岸諸国の大動脈なのであろう。遠くから飛行機のような爆音が聞こえる。後方の谷間から姿を現したスピードボートが近づき水飛沫を上げながらアツと言う間に抜き去ってゆく。

我々の船の乗客は白人が多い。2日間を狭いボートの中で過ごすと、お互い遠慮も少し取れてきたし、私のたどたどしい英語にこたえてくれる相手も出来てくる。ロンドンの青年とはすっかり親しくなった。後方のトイレへ行くときは、その都度何かと話しかけてくれる。

イングランドの可愛いねーちゃん。これも、トイレから戻ってくるとき、手を上げて停めて

話しかけてみた。会話の練習の為だ。彼女は独身、友人と2人で3週間の休暇旅行中とのこと。

その他、新婚旅行中のオーストラリアのアベックが1組。別に、昨日から人目構わず飽きもせず「ちゅっちゅっ」が3組ばかり。これらは、白人と、かなりな歳の差と見られる現地人女性のカップルだ。ペチャペチャ、ビチャビチャ。狭い船内、少しは遠慮せい。年寄りには精神衛生上宜しくないよ

白人の小学低学年ぐらいの可愛い女の子3人、かみさんに、ビスケットを持ってきてくれたり、描いた絵を見せに來たりして仲良くなった。

右岸のタイ領にリゾート地らしきものが見え、手入れの行き届いた山の斜面の果樹園が見えたりしてくる。左岸のラオス領には、終始手着かざるの自然が広がり、それらしき物は見えなかった。

河岸で遊んでいる子が手を振る。白い歯が見える。こちらも応えて手を上げる。

5時近くなって山陰に入ると川風が急に冷たい。川幅が狭まる。30メートルもあろうか、流れが渦を巻く。そこを抜け出て太陽が西に傾いた5時ごろ、平野部に入り、川幅も広く、流れもゆったりとなった。

何となく、乗客も疲れが出てきたようで船中にぐったり疲労感が漂う。

5時半、ラオス側に白い14夜の月が浮かんだ。5時40分、フェーサイのイミグレーションのある埠頭よりも更に4~500メートル先の船着場に着岸。2日間、260キロメートルの船旅を終えた。

この夜、フェーサイの宿で目をつぶったら、体がゆらりゆらりと揺れているような感じがいつまでも止まらなかった。

「南国暮らしの会」 法人設立5周年記念実行委員会

委員長：市東明義
委員：高沢弘晃 山田宏秀 細田良子
小林 孝 平方 譲 島田栄一

中間報告

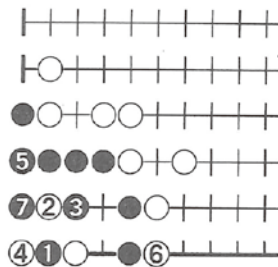
1. シンボルカラーの設定
 2. シンボルマークのカラー化
(2005年新年号の表紙に掲載)
 3. 会旗を作成し国内外支部へ配布する。
縦90cm横1350cmの大型と卓上A4サイズ
 4. 会員用にネクストラップを作成
(ブルーに白のネーム入り)
 5. 会報に特集号を編入する。(2005年新年号に予定)記事を提供して戴ける方は委員までご連絡下さい。お待ちしております。
- 以上の事項を委員会として決定し9月の理事會に答申する。

平成16年9月10日
南国暮らしの会5周年行事委員会

詰碁解答 黒先生き

黒1とつけ、白2、4には黒5の追落としねらいが好手です。

黒3でうっかり7は、白3とつがれコウです。



警 告

南国暮らしの会 理事長 酒匂景輝
会員の皆様、お健やかに過ごしの事と存じます。

この度、詐欺及び詐欺まがい、営業行為等の事件が発生し、この様な警告文を皆様のところに発信する事は誠に残念でなりません。皆様も不愉快な記事だと思われる事でしょう。が、明日は我が身かも知れません。最後まで読んで頂くことをお願いします。

南の会も現代社会の縮図と言うものでしょう。残念な事件が起こり、理事会で慎重審議の結果、個人の名誉の為、実名は伏せて、今後の再発防止対策として警告文を掲載することとなりました。

下記に該当するような事柄に個々の会員が携わらなければ問題は発生しない筈です。自分に置き換えて、この様な事はやらぬ、また仲間にやらせないをモットーに会員相互の交流、親睦を図りましょう。

I、トラブル防止対策

1、会員同士の金銭の貸し借りは絶対禁止。

金銭の貸し借りは詐欺まがいに発展します。貸した人が当初から返済を期待しない考えなら、会として何も言う事はありません。その様な気持ちの広い方は自分がこの様な被害を被ったと、他の会員にMLや会報などで自分の事を開示して下さい。当人の体験ならば実感があり、それ以上の被害は食い止められます。

今回某支部長の機転で、詐欺まがいの行為は未然に防ぐ事が出来ました。

但し外国で所持品盗難等の被害で困った場合は、警察への被害届等の客観性のある事を要件として、我々会員は自主判断で、出来るだけ支援しましょう。その場合でも金品等の授受があったら、借用書は必ず正、副を取交わし、後日のトラブル発生防止対策をして下さい。

2、会員同士の投資勧誘（ボランティアを絡めた投資勧誘含む）行為絶対禁止。

この件は現実に発生しております。現地の若者に仕事を与える為に、A会員がB会員に話を持ち掛け、B会員はその話に乗って大金を投資しましたが、ある時点でA会員が行方不明になり、B会員は途方にくれている状態です。（投資した物件は現地人の名義になっている為、その物件は取り戻せないでしょう。）このA会員は、今年度は会費未納の為に自動的に退会扱いにしました。尚A会員は永久除籍とします。

3、会員同士の営業行為絶対禁止。

近頃会員名簿やサロン・懇親会等で人脈を作りマルチ商法行為をなさんとしている会員が居ます。そ

の為に参加した会員が不愉快な思いをしております。

この様な会員を排除する事は、皆さんがその物を購入しなければ良いのです。この会では商売にならぬとなれば自然に排除されます。

この様な会員が現れたら、事務局へ連絡して下さい。メーリングリスト（ML）のメンバーから削除し、ML等で、会員に公表する事も考えます。

細則〔会員資格〕第2条-(1)-②により、会員のあらゆる営業行為を禁止しています。

4、謝礼について

「南の会・必携」の生一頁に謝礼金の目安と言う項があります。この金額は我々が考えている国の殆どの外国人、日本人に適用出来る数値の筈です。これ以上の金額を要求する様な人物は要注意です。絶対付き合わないで下さい。

詐欺まがいの行為をする人物は、最初は凄く親切な人物が多く、つい断れなくて、となります。

II、お願いと注意

1、会員は海外支部に赴いた時は、必ず支部長に連絡を取り、逗留先と旅程の概要を報告して下さい。（長期、短期を問わず。）

2、支部長の皆様 大変でしょうが、会員の概略の動静を把握しておいて下さい。ご協力の程お願い致します。（本件は強制ではありません。）

3、自己責任この四文字は常に会報に掲載しています。NPO 法人では、定款第11条（非営利活動法人促進法）により不逞な会員が居ると云われても、残念ながら簡単に処分する事は出来ません。会の役員は皆さん方と同じ会員で、裁く事は出来ません。

定款第11条により、除名は総会の議決が必要で、それには被害者などの被害届（被害届は明記されていませんが、処分等には常識的な必要書類です。）等が必要です。その為の情報収集はいりませんが、それも皆様の協力が必須条件です。

甘い話に乗らないで慎重に行動して下さい。日本の刑法は、社会構造上からか、何故か加害者を擁護しているように思えます。

この世には善人だけの社会は有り得ません。

「南の会」だけを善人の集いにすることは不可能です。夫々の会員が自己防衛するしか対策は有りません。

4、外国人と結婚をしたら、経済的にしっかりと面倒をみる事が出来ないと、相手に訴えられ、入国管理局に逮捕されるそうです（日本では家裁で解決する事でしょうが）。 **“ 要 注 意 ”**

*定款と細則に矛盾点があり、今後、役所とも折衝し、出来るだけ整合性のある条文に改めます。

次回は楽しい愉快的記事を書きたいものです。皆様のご健康とご多幸を祈念しております。

支 部 ・ 部 会 伝 言 板

九州支部サロン会 支部長 稲延 豁

日 時 平成16年8月26日(木)

午後1時～午後4時

場 所 福岡市天神NPOボランティアセンター

出席者 11名(ビジター1名)

特別参加南の会会長池田徳三郎

会費500円

① 支部長挨拶 九州支部のネット作り充実発展に頑張りたい。

② 会長挨拶

イ. PC を持たない会員の為の情報交換ができる方法を考えていきたい。

ロ. ロ.会の趣旨を理解して頂く為の PR が必要でその為の方法を検討して頂きたい。

③ 体験発表 白井征勝 バリ島8日間

バリ島8日間のショートステイの目的はスキューバダイビングの国際ライセンス取得でした。要した費用は30,000円(食・泊付)でした。

④ ステイ目的披露 岡村欣二 フィリピン・スービック空軍基地調査に是非行きたい。

⑤ 質疑応答

ボランティア(会の目的と趣旨について)

会長:外地のロングステイやパック旅行の希望者は具体的な生の情報を教え、事前にトラブルのないよう安全対策をフォローする。

⑥ ロングステイ調査旅行(スービック・パギオ)

希望者多数につき、9月から10月頃フィリピン(スベック・パギオ)方面と決定。

⑦ ビデオ鑑賞「パギオこそNO.1」 山田氏(会友)

⑧ 支部活動の活性化の方法・支部委員依頼承認

懇親会 料理屋「ウエストサイド天神」17時～21時20分 出席者7名 費用一人3400円。女性のテンション振りは男性軍の舌を巻く。九州モッコ、九州女兒此処に有りだ。最後の乾杯で一層の懇親の度合いを深めた充実した一タだった。

関西支部

支部長 森川 清

日 時 平成16年7月度 例会

7月3日(土)午後1時～5時

場 所 於、芦屋市民センター

参加人員28名

(支部会員総数79名ー6/28現在)

本部より宮崎副理事長にお出で頂きました。15年度の活動、会計報告、672番 丸山百合子氏に支部庶務をお願いし、承諾を頂きました。

宮崎副理事長に最近の会の動向をお話頂きました。

例会は副理事長の「フィリピン・ロングステイ」についてセブ、ダバオ、パギオのお話を拝聴しました。

今回、出席者相互の意見交換を図るべく、分科会を設け

A、ステイ先の選択と理由。B.南国暮らし実現後の楽しみ方、テーマとし、A.17名、B.11名に分かれ活発な話し合いを持ちました。この反響は大きく、今後の例会で種々の課題を話し合う第一歩になりました。5時終了。続いて懇親会に移り盛會裡に7時過ぎ散会しました

東海支部

支部長 横井保夫

東海支部 2004 4月ー9月 活動状況につき、概略を下記いたします。

(1)定例会およびサロン会出席状況

4月 定例会 21名 週日サロン会 8名 計29名

5月 サロン会 16名 13名 計 29名

6月 " 25名 7名 計 32名

7月 定例会 11名 5名 計 16名

8月 サロン会 16名 11名 計 27名

9月 27名 計 27名

(週日サロン会含まず)

尚、定例会サロン会の後、場所を変えて懇親会を実施しました

8月週日サロン会では、パギオ支部会友 山田勝

也氏、9月サロン会後懇親会では、ダバオ支部長平野雅一氏を囲んで東海支部もフィリピンに感激に傾いてきました。

(2) 主な活動およびトピックス

4月 定例会 南国滞在会員へのコンタクトに関するトラブル回避について話し合い（現地会員の精神的・時間的拘束の謝礼金目安について等）

5月 サロン会 山本義典氏ペナン調査旅行（5月1日～5日）の報告、ペナン生活コスト、住宅事情など詳細な調査をされた。

6月 サロン会・鈴木憲介氏が、サモア フィジー トンガ旅行、特に最近話題の健康飲料水、ポルネシアン ノニ ジュースの調査報告（詳細興味ある方は直接鈴木さんにどうぞ）世界1安いゴルフ場（18ホールがなんと 320円）がサモアにある由。

・田澤満氏 子連れでゴールドコースト サンシャインコースト 生活環境調査旅行報告

・東海支部 英会話クラス 本日よりスタート

英国人 ウォレス スコット講師”楽しい英会話”

日本人の苦手な L と R、F と H、V と B 聞き分け話わけ、出国入国カウンター、ホテルチェックインなど。先生がオフィサー、ホテルの受付になって実地訓練。

9月 サロン会 趣向を変えて、名古屋国際センターで行われたインドネシアフェスティバル見学。大使挨拶の後には、バリ舞踊、ジャワ舞踊、スマトラ舞踊、インドネシアの歌、バリガメラン楽器音楽、尺八演奏（なぜ尺八かわからん）を鑑賞した。

関東支部 関東支部長 宮崎哲郎

関東支部サロン会（7月、8月）

<7月サロン会>

司会・進行役に No.740 渡辺亜雄さんがデビュー、名司会振りを発揮され初の大役を成功裏に務められました。出席者：43名

この日は新会員・ビジターの自己紹介に引き続き対象5カ国をグループに分け各国の情報交換が活発に行われました。

ロングステイ体験者・一時帰国者の方々の報告は下記の通りです。

パース：藤本靖人さん、ベルギー：有馬憲三さん、バリ島：石川やすおさん、加藤 明さん、ペナン：黒岩国光さん、伊藤 寛さん

<8月サロン会>

司会・進行役 NO.700 安藤公二郎さんで行われました。出席者：59名

地域を5カ国（フィリピン、タイ、マレーシア、バリ、オーストラリア）に分かれ情報交換が行われました。ロングステイヤーによる体験談は下記の方々でした。

オーストラリア：磯崎興志さん、バリ：梶村真一さん、マレーシア&香港：加藤 明さん、フィリピン：宮崎 哲郎、タイ：酒匂景輝さん、山田宏秀さん。会友ワールドステイクラブから2005年1月カリブ海クルージングの案内と参加者の募集がありました。

懇親会はフェスタガーデンにて、南の島に思いを馳せ飲みにケーションをしつつ、情報交換&懇親を行いました。



懇親会風景

関東支部からのお知らせ

「楽しい英会話」は8月で<PART-1>が終了し9月13日より<PART-2>応用編が始まりますのでお知らせ致します。

講師安藤さんのユーモアに富んだ絶妙な教授法が大人気を博し受講者がうなぎ昇りの状態で教室が満杯です。さすが元航空会社でレッスンされておられたベテランならではの、です。内容を見られる様に「楽しみながら覚える」がコンセプトです。

①航空機内 ⇒メニューに乗務員の名前を書いて貰うとプラスαが！

②レストラン⇒丁寧な英語表現を使うとサービスが良くなります。

この人気の故、更に「町田教室」の開講も近々予定されております。

この安藤さんを支えるスタッフ赤嶺さん、No819、近藤さんも皆さん英語のプロです。皆さん頑張ってください。



安藤先生と受講生の皆さん

北海道支部 支部長 工藤俊一

北海道支部のホームページを立ち上げました。

北海道在住会員の皆様へ

会員相互の連絡用として、北海道支部掲示板ができました

URL <http://bbs1.on.kidd.jp/?0101/nangoku01>

是非 返信の代りとして、投稿してみてください。

平成16年度

『南の会北海道支部情報交換会』のご案内

北海道支部長 工藤俊一

問合せ 総務:堀江幸博

今年の夏は記録破りの暑さの中、オリンピックの金メダルラッシュに加え、道民の願いに見事に答えてくれた駒大苫小牧の全国制覇と久しぶりに燃えた夏だったのではないのでしょうか。

さて、平成16年度の『南の会北海道支部情報交換会』を、下記の日程にて開催する運びとなりました。

ご多用中のこととは存じますが、是非ご出席くださいますようお願い申し上げます。

準備の都合上、9月27日(月)までご返信ください

ますようお願いいたします。

欠席の方も、お手数ですがご連絡下さい。

記

・日 時 10月10日(日) 14:00~16:00

・場 所 札幌市男女共同参画センター研修室5

JR札幌駅北口より徒歩5分 011-728-122

札幌市北区北8条西3丁目札幌エルプラザ4階

・内 容

1. 支部長挨拶 工藤支部長

2. 情報提供「アラスカ・クルーズ」 工藤支部長

3. 情報提供「初めての海外旅行(バリ島体験)」

小澤 和子様

4. 情報提供「初めてのバリ島5泊」 大塚恵美子様

5. 皆様から一言

※会費 300円/人

終了後、近隣で懇親会を予定しています。

※予算 3500円/人程度

総務(事務局)担当より

担当理事:宮崎哲郎/菊地 功/高田勝弘

1.7月以降の総務部門の主な活動は以下の通り。

07月06日(火):品川法務局に指摘箇所再申請。

07月11日(日):16年度第2回理事会。

07月12日(月):品川法務局に指摘箇所再申請。

08月12日(木):16年度臨時理事会。

09月12日(日):当会入会案内書改訂に関し、「会報」中の投稿記事2年分のレジュメを新たに作成、取り纏めて会員担当理事に送付。

09月26日(日):16年度第3回理事会。

09月27日(月):特許庁に商標登録料納付。

2.商標登録の件

昨年10月特許庁に出願した当会ロゴマークの商標登録願に対し、本年9月10日付けて「登録査定書」が届きました。途中1回の拒絶理由通知書に対し、申請サービス範囲を変更する手続きを行い今回やっと登録査定を戴いたものです。最終的に対象となる商品は「雑誌」、サービスは「ホームステイのためにする宿泊施設の提供に関する情報の提供」ということになりました。もっと一般的なサービス

を狙いましたが拒絶され、こうなりました。
いずれにしる「南国暮らしの会」という名称の入った、似たようなロゴマークを他者が雑誌に掲載することはこれで出来なくなるわけです。そして1項記載の如く9月27日、本年度予算に計上してある商標登録料を特許庁に納付して正式な登録となりました。

3.細則の追加変更の件

会として近い将来、既発行会報などをベースとした図書等の出版を企画しており、その際の執筆者とのトラブルを防止するため、細則の改訂を理事会(9/26)において審議し、以下の如く追加変更することとしました。細則の改訂ですから、最終的には次期総会で承認されて始めて正式の改訂となりますので、本改訂にご意見のある方は本年中に事務局菊地までご連絡下さい。

細則の附則第14項を以下の如く変更し、現第14項は第15項に繰り下げる。

附則14. 南国暮らしの会は会報など南の会出版物に掲載の投・寄稿記事を、事前に執筆者に連絡することなしに、会のその他の出版物に転載することが出来る。

(2)会のこの権利は、転載時、執筆者が現会員であるか否かにはよらないものとする。

(3)原出版物はNPO 法人認証以降の出版物に適用されるものとする。以上

インターネット委員会よりお知らせです。

委員長 高沢弘晃 委員 島田栄一 阿部 功 皆さん、メーリングリストってご存知ですか。

Eメールのリスト一覧でしょう、会のEメールリストをどうするんですか、なんて質問が来そうです。

そうではありません、今南国暮らしの会の皆さんはEメールをお持ちの方が多数おられます。これらの会員同士でEメール交換しようというのがメーリングリストです。会員同士でメール交換を行い南国情報を交換するEメールグループです。

現在、メーリングリストに登録されている方は340名以上になりました、南国情報をメーリングリストに掲載しますと、一度に

340名以上の方にメールが届きます。私は海外情報に困っています、なんてメーリングリストに掲載しますと、大勢の方から新しい情報を提供してくれます

如何ですか、まだ未登録の方、ぜひ登録ください。お待ちしております。

又以前登録していた南国メールが最近来なくなった、或いはアドレスが変更になった、そのような方も以下のアドレスにメールをください、お待ちしております。

登録方法は 右のアドレス fwjc5962@nifty.com に「登録希望」と書いて会員番号、氏名を書いて送ってください。お待ちしております。

医療介護調査委員会

委員長 平尾守満 委員 大野悦子 平沢信
藤本靖人 菊地範夫 佐藤サツキ 二ノ宮昭夫
磯崎興志

「海外暮らし便利帳—医療編」の発行作業

10月中旬に脱稿—印刷屋へ原稿納品

11月末—発行

◆会員への発送は費用予算化していないため
新年号の会報に同封……?

会員担当より

1.会員動向

1)会員数:511組(平成16年10月5日現在)

家族会員を含むと約800余名になります。

2)会員担当理事の723 山本幹夫氏(工博、1級建築士)がJICAの海外技術協力隊員及び埼玉県親善大使としてブータン王国に11月から派遣される事になり退任されます。後任として会員No.814:平賀國廣氏が理事として9月26日の理事会に於いて選任され、業務の停滞のなきよう引継ぎ済です。皆様のご協力の程宜しくお願い致します。

3)会員No.236:富成智枝氏(歯科医)もJICAの海外技術協力隊員としてサモア国に10月から派遣される事になりました。

尚ご両人は2ヶ年間ですので、会費は前納され会員在籍のまま赴任されます。

本件は皆様にもホットニュースと思い掲載しました。皆で歓送しましょう。

2. 意識調査について (調査票は添付)

本会員も500組を超える大きな組織に変貌し、社会的にもそれ相当に認められる存在になってきました。

NPO法人認証5周年と会員数500組突破という節目の年でもあり、再度皆様に問い掛ける次第です。

返却調査票の各設問の過半数を獲得した項目を平成17年度より採用することに致します。大切な問い掛けです。この結果では会の運営も大幅に変わりますので、全会員の調査票返却を期待しております。

1) 会員名簿の件

現在全会員に名簿を配布していますが、個人情報の開示は問題が有ると言う会員が多くなってきました。数年前に意識調査した折りは配布賛成者が多かったので、現在に至っています。

上記節目の年と言う事と、現代の世情を勘案し、再度皆様に問い掛ける次第です。

2) 住所変更届けについて

夏季も返品と移転の為の未着が8件もありました。どうしてでしょうか？ 困ったものですね。その対策を問い掛けます。

3) 皆様の建設的な提案をお願いします。但し自分でその提案に責任を持って遂行出来る提案にして下さい。(理想論では困ります。)

この会はお互いが力を合わせ盛り立てなければ存続出来ません。キャリアの持ち主が多いので、関東にお住まいでない方でも、協力して頂ける事柄は多々あると思います。

4) 会員現況調査

本調査票は平成14年度以前の入会者は出来るだけ協力して下さい。(15年度以降の方は不要です。)

担当: 山本・高田・龍野・平賀

酒匂 記

◇友好団体の掲示板◇

☆(財) ロングステイ財団

心のゆとりと豊かさを実感させる「ロングステイ

Tel:03-3505-4477. Fax:03-3505-4433

E-mail: info@longstay.or.jp

URL: <http://www.longstay.or.jp/>

東京都港区東麻布 1-28-2(第六文成ビル2階)

・月～金 9:30～17:00 ・(祝日休)

責任者: 事務局長 神山修一

☆ワールドステイクラブ【WSC】

本クラブは【世界で作ろうシニアの生きがい】をスローガンに、海外旅行・滞在生活を通じて精神的な充実と生きがいを求める親善団体です。

住所: 〒162-0827 東京都新宿区若宮町 37

セレクトビル 2F

電話・FAX: 03-3268-2731~2732

E-mail: worldstay@nifty.com

<http://homepage3.nifty.com/worldstayclub/>

入会方法: 申込み資料請求(要 500円・郵券可)

創立: 1995年11月 [会員数] 約900名

代表者: 西 博

入会金: 5,000円 ・年会費: 6,000円

☆チェンマイ ロングステイ ライフの会【CLLクラブ】

・ロングステイの為の案内、相談及び入会受付、「南の会」の会員も多数入会されています。なお事務所では会役員が対応しております。

・入会資格は会員の推薦又は事務所での面接によります。

・主な催し: 1ヶ月2回の例会、週2回のゴルフ例会(1ヶ月1回コンペ)、ソロバン/パッチワーク/ブリッジ/料理/ダンス教室等

・会報: 毎月発行(現在カラー版4ページ)

・その他: 図書(蔵書2500冊)室にはPCも常設。

・事務所: タイ日センター2階《軽食堂エビス内に昇降階段》(チェンマイ プラザ Hの左隣)

・電話: 053-81-9270 ・会員数: 約100名

・事務所開設日時: 月～金 14時～16時

・入会金: 無料

掲 示 板

☆図書案内

『タイでロングステイ』

ーイカロス出版

「ラシン」の本を出版している会社から、各国のロングステイ情報満載しております。

今回はタイのバンコク、チェンマイを中心としてわが会のメンバーが4名ほど体験談として掲載されています。(バンコクの村上安さん、阿部功さん、チェンマイの石川さん、高野さんです)是非ご覧ください、タイの1から10まで親切な内容で掲載です。

勿論 わが会も紹介されています。

価格 1500円 赤い色の表紙です。

尚 イカロス出版ではシリーズとして「ハワイでロングステイ」「マレーシアでロングステイ」を来月以降発売し、会員の皆さんが多く登場します、ご期待ください。タイ好きの皆さんには御馴染みの情報誌 DACO9月5日号にシーラチャ沖合いの島シーチャン島が特集されました。黒鯛がどっさりの写真が出てまいります。DACOは日本でも神田で有料販売しています(会員の伊藤カンさんが詳しい)。会報2004夏季号24ページに私の「シーラチャ」ステイ記事が載っています。シーチャン島にも二度行きました。

記事にもありますが、滞在時、日タイ数人に聞いてもシーチャン島の「筏つり」予約方法が判らず涙をのみました。

後日Somchaiさんの筏つりが判明しましたが、日本人経営者が不明でした。記事によりますと「ジンダ筏」の竹本さん(09-056-1299)がその方で発案者だそうです。(なお、竹本さんは高齢なので後継者を募集してますよ。日本人相手主体で日本語でOKとか、ビザ不明)

シーチャン島から筏への往復込みで600B、餌と道具は100Bとの事。現地で全てOKです。シーラチャからシーチャン島へは30B40分です。

(1B=2.8円)次回手ぶらで行って(醤油わさび持参)、筏の上でさしみてビールを楽しみたいですね。

シーラチャとシーチャン島については

<http://abeisao313.1d.infoseek.co.jp/nangoku2.htm>

の「タイ各地-2」にもアップしておきました。つりに興味ある方は参考にしてください。

『海外で病気になったら絵で会話』

ー東アジア・東南アジア・南アジア編

吉岡 保 監修

発行日：平成16年2月13日

発行社：(株)法研

価格：¥1200+税金

☆カナダの携帯電話事情

No. 795 菊島さんのお嬢さん(バンクーバーに留学されていた)からこの件詳しく有益な情報を頂きましたのでお知らせ致します。大変有り難う御座いました。

予想通りカナダでもこのSIMカードシステムは有効であり、今回宿泊先近くのダウンタウンに行けば携帯ショップのある事、バンクーバーでは携帯がかなり普及している事も判明。目的が叶いそうで嬉しくなりました。

各国のSIMカード集めるのが趣味になりそうです。

東南アジアで安く買った携帯電話一台あれば高いレンタル料払って日本から電話を持参しなくてもSIMカード(約1,000円)を取りかえれば日本を除く世界各国でOKです。短期滞在でも便利と安心感が得られます。

☆夏季号発送をお手伝いして戴いた方

No. 80 阿部 功 No. 101 高沢弘晃
No. 240 菊池範夫 No. 423 村上 安
No. 428 岩瀬光子 No. 434 大野悦子
No. 493 平澤佳子 No. 519 常楽 衛
No. 596 山本 勝 No. 723 山本幹夫
有難うございました。♪

☆ ★ ☆ 編 集 後 記 ☆ ★ ☆

金木犀の香りがする季節に、秋季号をお届けすることができて、ほっとしています。

寄稿して下さった会員の方々、また校正をお手伝いして下さった No. 245 佐藤真理子氏、No. 433 乾谷春美氏、No. 625 工藤俊一氏に深く感謝申し上げます。

やはり原稿集めがいちばん大変です。みなさま是非どんどん担当者まで、原稿をお寄せ下さい。

4月からの原稿依頼・・・やっと開放されて親孝行、旅行ができます。みなさまご協力ありがとうございました。(秋季号担当：細田良子)

島田 栄一 TEL : 042-365-5287 (新年号担当)
Eメール : sa.eiichi@r3.dion.ne.jp
平尾 守満 TEL : 0426-26-3665
Eメール : hirao.morimitsu@nifty.com
龍野 宏 TEL : 048-781-4929
Eメール : hiro.tatsuno@nifty.ne.jp
細田 良子 TEL : 045-832-5615
Eメール : r-hosoda@jb3.so-net.ne.jp

原 稿 募 集

♪次回「新年号」は1月発行です。
原稿の締め切りは11月30日が目安です

記事の無断転載、複製を禁じます

発行者 特定非営利活動法人(NPO法人)
「南国暮らしの会」

理事長 酒匂 景輝
〒140-0002 東京都品川区東品川 3-22-20-1208
TEL 03-3472-9916 FAX 03-3472-9954

NANGOKUNANGOKUNANGOKU



NANGOKUNANGOKUNANGOKU